

グローバル化へのアプローチ

海外教育実習と国際交流事業を通して



愛知教育大学

はしがき

急速な国際化や情報化によりグローバル化が進展し、その影響が、身近な生活も含め社会のあらゆる領域に及んでいます。日本の教育の在り方も「グローバル人材育成」など、新たな事態に直面していることは明らかです。

文部科学省は、2011年5月に設置された「グローバル人材育成推進会議」において、「グローバル人材」の概念に含まれる要素として「Ⅰ. 語学力・コミュニケーション能力、Ⅱ. 主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感、Ⅲ. 異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティ」を提示しています。2004年以降、海外へ留学する日本人学生の数が減少していることから、グローバル人材育成に向けて、グローバル化時代に相応しい大学教育の確立、高等教育の国際展開の推進を挙げています。そして、21世紀に相応しいグローバルな視野を持つ大学生を育成するために、文部科学省が主催で「グローバル30」や「スーパーグローバル大学創成支援」等を通して、より積極的に学生の国際交流活動を実施しています。例えば、東京大学では2012年より、世界中から学部生を集め英語で教育をして学位を授与するPEAK（=Programs in English at Komaba）という教育プログラムを開始しています。東京大学矢口祐人大学院教授は、「PEAK～東京大学のグローバル化教育」（2015）にて、「このPEAKの授業では日本人学生も履修でき、外国人学生と日本人学生の交流の場であり、グローバル人材育成にとって効果的である。」と言及しています。

一方、現在、国際共通語として最も中心的な役割を果たしている英語は、グローバルな知識や情報を得る、発信する、対話、討論するための必要不可欠な言語であり、日本の将来にとって、英語コミュニケーション能力の向上は極めて重要です。文部科学省は、「初等中等教育段階からグローバル化に対応した教育環境づくりを進めるため、小学校における英語教育の拡充強化、中・高等学校における英語教育の高度化など、小・中・高等学校を通じた英語教育全体の抜本的充実を図る。」ことを目的として、「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画（平成25年12月）」を提示しました。そして、2014年の「グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言」では、「アジアの中でトップクラスの英語力を目指すべき。今後の英語教育改革においては、その基礎的・基本的な知識・技能と、それらを活用して主体的に課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等の育成は重要な課題」であることを述べています。したがって、教育現場では、国際感覚に優れ、児童や生徒に4技能を総合的に育成するための指導ができる教員（=グローバル人材）が一層求められています。

愛知教育大学の「オーストラリア海外教育実習プログラム」は、2011年に、文部科学省の「グローバル人材育成推進会議」における「4. 大学教育」の取り組みから、「世界に通用する高度な英語能力を有する人材育成のために、教育大学として海外での指導実践力を

向上させるための教育実習」として、同年8月11日に文部科学省大学振興課教員養成企画室にて提案し、採択された事業です。本学では、この事業を2010年度から実施してきた、文部科学省「特別経費プロジェクト（高度な専門職業人の養成や専門教育機能の充実）」である「小学校外国語活動を前提とした小・中・高での英語関連科目の連携を進める英語教員養成カリキュラムの開発と授業実践力を高めるための教育改革」の2012年度・2013年度に追加事業として実施しました。そして、このプロジェクトの継続新規として、オーストラリア海外教育実習のプログラムを主軸とし、また、これまで外国語教育講座で取り組んできたTOEICを活用した英語教育支援等も含んだ内容を発展させた形で、新プロジェクト「グローバル人材育成を主軸とした教員養成等プログラムの開発－海外教育実習、グローバル教育、フィールドワーク等の体験型教育及び、英語コミュニケーション能力と指導力養成カリキュラムの構築－」を事業名として、2014年度に応募しました。事業の主な目的として、「教員養成大学の特性を活かし、グローバル化に対応した教育ができる人材及び社会人を養成すること」また、「相互依存の理解、地球的課題の理解、多文化教育、国際共通語等のグローバル教育、英語コミュニケーション能力と指導力養成のカリキュラムを構築すること」を掲げました。具体的には、相互依存の理解、地球的課題の理解、多文化教育等のグローバル教育を踏まえて、2012・2013年度に実施した「海外教育実習」（於オーストラリア）のカリキュラムの更なる開発研究や本学でのニューマン大学の学生との交流プログラム、及び、国際共通語としての英語の「4技能の総合的な能力の育成」のために、TOEIC等による将来の英語系担当教員の英語力の評価と育成の研究開発プログラムを構築することを事業内容としました。そして、これらの活動を支えるための機関として、2012年度に設置した「小中英語教育支援室」を2014年度から「英語サポートセンター」と名称変更し、現在、このセンターを中心に英語コミュニケーション能力を向上させるための様々な活動が実施されています。なお、新プロジェクトが文部科学省で採択され、2014年度から4年間実施予定でしたが、文部科学省の変更で、新プロジェクトは2年間で終了し、2016年度からは毎年プロジェクトに応募申請することが必要となりました。

本書は、新プロジェクトの活動報告を中心に著したものです。本事業「オーストラリア海外教育実習プログラム」「ニューマン大学の学生との交流プログラム」「英語サポートセンター」に参加した学生たちが、「グローバル時代の先導的な教育者」としての役割を担ってくれることを願っています。

最後になりましたが、本事業にご協力いただきました関係者の皆様、また、本報告書を執筆して頂いた方々におかれましては、年度末の大変お忙しい中、本書のために時間を割いて頂きましたこと、心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

2016年3月吉日

愛知教育大学外国語教育講座 本プロジェクト代表
高橋美由紀

グローバル化へのアプローチ

海外教育実習と国際交流事業を通して

目 次

【グローバル化に対応した教員養成】

- 「グローバル人材育成のためのオーストラリア海外教育実習」 1
高橋 美由紀 (愛知教育大学)
- 「International Exchange
– A short study visit program for students from Newman University」 20
Anthony Robins (愛知教育大学)

【オーストラリア教育実習の実践報告】

- 「オーストラリア教育実習プログラム実施報告」 31
Anthony Ryan・Anthony Robins・高橋 美由紀・長峯 貴幸・山田 美樹・稲垣 真由美
(愛知教育大学)
- 「オーストラリア教育実習アンケート報告」 55
高橋 美由紀・Anthony Ryan・稲垣 真由美・山田 美樹 (愛知教育大学)

【学生レポート】

- 「オーストラリアでの授業実践及び現地で感じた違いについて」 67
有本 明日翔 (愛知教育大学)
- 「オーストラリア海外教育実習報告書」 71
荒井 颯人 (愛知教育大学)
- 「オーストラリア海外教育実習報告書」 76
加藤 佑美 (愛知教育大学)
- 「実習中に感じた日本とオーストラリアの教育事情の違い」 78
矢田部 希 (愛知教育大学)

【2014, 2015 年度 活動報告】

- 「グローバル人材プロジェクト活動報告
ーグローバル英語教育研究開発室の取り組み」 79
山田 美樹・稲垣 真由美・長峯 貴幸 (愛知教育大学)

グローバル人材育成のためのオーストラリア海外教育実習

高橋 美由紀

愛知教育大学

1. 緒言

「オーストラリア海外教育実習プログラム」は、2011年に、文部科学省の「グローバル人材育成推進会議」における「4.大学教育」の取り組みから、「世界に通用する高度な英語能力を有する人材育成のために、教育大学として海外での指導実践力を向上させるための教育実習」として、同年8月11日に文部科学省大学振興課教員養成企画室にて提案し、採択された事業である。本学では、この事業を2010年度から実施してきた、文部科学省「特別経費プロジェクト（高度な専門職業人の養成や専門教育機能の充実）」である「小学校外国語活動を前提とした小・中・高での英語関連科目の連携を進める英語教員養成カリキュラムの開発と授業実践力を高めるための教育改革」の2012年度・2013年度に追加事業として実施した。

本稿では、上記の事業、及び、それを発展させて2014年度から実施しているプロジェクト「グローバル人材育成を主軸とした教員養成等プログラムの開発－海外教育実習、体験型教育及び、英語コミュニケーション能力と指導力養成カリキュラムの構築－」での「オーストラリアでの教育実習プログラム」についての事例研究、(1)プログラムの内容、(2)現地での実習の様子、(3)参加した学生の感想や体験報告等を踏まえて、これからの「教員養成大学の特質を活かしたグローバル人材育成」について示唆する。また、今後の「グローバル人材育成のための海外教育実習プログラム」についての課題と展望を述べる。

2. 海外教育実習プログラム実現のために

2.1. 海外教育実習の位置づけ

「小学校外国語活動を前提とした小・中・高での英語関連科目の連携を進める英語教員養成カリキュラムの開発と授業実践力を高めるための教育改革」の事業は、学内に設置した『小中英語教育支援室』を拠点として、(1)教員養成大学として小学校外国語活動から中・高校での英語教育への連続性と、(2)大学教育の確立を目指して、国際社会に開かれた大学として、高等教育における国際化を促進することを視野に入れた教育実践及び英語授業モデルの構築を主たる目的とした。そして、(3)小中学校教員を志望する学生が、外国語活動や英語教育を指導するための実践力を涵養するとともに、実践現場での指導的立場を担える人材の育成を目指した。また、(4)小学校外国語活動に不慣れな現役教員に対して、確かな授業力を養う機会を設けると同時にリカレント教育の質を向上させ、さらに、(5)大学と国内及び海外の学校現場の連携を通して小・中・高の連続性を見据えた、英語コミュニケーション活動の創造、及び、(6)附属学校や地域協力校で行われている質の高い授業実践の

場を事業の核として、現場と教員養成と授業研究との連携を密にするものとした。

日本の英語教育、とりわけ、小中高等学校で求められる教師の資質・能力として、「英語コミュニケーション能力」と「授業の指導力」は必要不可欠である。

海外教育実習事業は、上記の(2)(3)(5)を主体とした取り組みであり、大学教育の確立を目指して、高等教育機関の国際化を促進するために、海外現地校での教育実習等の体験を入れた特徴ある教員養成を行うこととした。具体的には、本学の英語教員を目指す学生に対して、海外の日本語教育のティーチング・アシスタント、及び、海外での英語の教育実習を行うことで、学生の「実践指導力（英語コミュニケーション能力と授業の指導力、異文化理解教育）」の向上を図ることとした。

2.2. 文部科学省での提案

文部科学省は「グローバル人材」の概念として、(1)語学力・コミュニケーション力、(2)主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感、(3)異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティー、の要素を示した。一方、課題として2004年以降、海外へ留学する日本人学生の数が減少していることを挙げ、グローバル化時代に相応しい大学教育の確立、高等教育の国際展開の推進を掲げた（文部科学省、2011）。

これを受けて、「グローバル化時代の人材育成の推進に寄与するために、大学生の留学経験者が小中高の教育現場で異文化体験を効果的に活かす機会を充実させる。」ことを主張し、以下の様に、文部科学省にて提案を行った。

日 時：平成23年8月11日（木） 14：00～ （2時間程度）

場 所：文部科学省大学振興課教員養成企画室

出席者：東京学芸大学、大阪教育大学の副学長、担当者等。

愛知教育大学（白石理事・事務局長、岩崎理事、高橋美由紀、福井財務課長）

用 務：「平成24年度概算要求特別経費(プロジェクト)小学校外国語活動に係る打合せ」

内 容：（愛知教育大学の提案のみ記載する）

「グローバル人材育成を担う大学教育の確立、とりわけ、教員養成大学の特性を活かし、大学と海外の学校現場との連携を通して、有効な英語コミュニケーション活動の創造と授業モデルの開発を行うこと、併せて、世界に通用する英語能力を有する実践力のある教員養成を行うことについてのプログラムの提示」

2.3. 実践学研究としての海外教育実習研究

2011年度に、高橋、Anthony Ryan（以下 Ryan）、Anthony Robins（以下 Robins）は、学長裁量経費「研究支援経費」に「国際交流や学生の海外派遣において教員養成大学が国際化に果たす役割の研究」というテーマで応募していた。この研究の目的は、「高等教育、とりわけ、教員養成大学における国際化のあり方の一つのモデルを示すことである。具体的には、学生の国際交流や留学を通して、それぞれ母語教育の授業のアシスタントやティ

ーム・ティーチングの形で、現場の教育に関わることを目指す。」とした。

先行研究として、高橋は、インドネシアの学生が、インドネシア語を外国語として学んでいる児童・生徒の授業のティーチング・アシスタントや、英語の指導技術を磨くために、Ironsides State School (オーストラリア・クイーンズランド州)で教育実習を行っていたことによる調査研究、及び、現地で自らが日本語教育の指導を行った経験による日本語教育についての研究を基にした。

Ryan は、これまで長年、オーストラリアに英語専攻の学生を引率し、学生の英語力の向上と異文化理解教育を通じた研究、また、Robins は、英国 Newman 大学での学生派遣を通して異文化コミュニケーション等の研究を長年行ってきていた。さらに、Ryan はオーストラリアの大学や小中学校、高橋はシンガポール教育大学等の教員等との交流から、海外での教育実習についての情報を得ていた。

これらの研究を踏まえた上で、海外派遣の学生が教育実習を体験できる内容の留学プログラムを実施し、教育大学の海外派遣のモデルとして提案することを実践学研究として実施しようとしていた。

3. 海外教育実習の学生派遣の実際

3.1. 海外教育実習派遣の過程 (2011 年度～2013 年度)

ここでは海外教育実習を実施するにあたって、オーストラリアでの派遣校事前視察から実際に学生を派遣し、さらにその後に至るまでの流れを紹介する。本取り組みに関しては、2012 年の初回派遣に至る 2 年以上前から Ryan によって現地オーストラリアの教育委員会、学校長と密に連絡のやり取りが行われ、プロジェクトの目的にご賛同いただいて実現された。8 月から 9 月中旬での派遣のため、4 月の段階で Ryan によるオーストラリアで事前視察が行われ、Ryan の現地での教師経験による人脈も生かしながら慎重に派遣校が選定されていった。

派遣学生は、本学教育学部中等教育教員養成英語専攻・選修、国際文化コースの学生の中から希望者を募り、面接を実施して選考した。その後、選ばれた学生は 8 月の派遣に至るまでに、現地で行う日本文化を紹介するプレゼンテーションの準備を、海外教育実習のオーガナイザーで Ryan と、その補佐の Robins による熱心な事前指導を重ね、入念に準備をした。実際の派遣期間中は、「Wikispace」という特定のグループを作り情報交換ができるオンラインシステムを利用し、派遣学生および引率教員がこまめにコミュニケーションを取り、情報共有や情報交換を図った。帰国後は Ryan によって事後指導が行われた。さらに、12 月に開催された愛知教育大学教育創造開発機構 教員養成高度化センター 小中高英語史教育支援部門主催 小中高英語教育教員研修会にて、任意で集まった学生が海外教育実習で実際に行った授業を紹介するなど、この教育実習から学んだことを発表した。

以下の表 1, 2 は 2012 年度、2013 年度に実施した海外教育実習派遣の流れをまとめたものである。2012 年度は学生 21 名が参加し、14 校へ派遣した。期間は 8 月 24、25 日から 9 月 16 日または 18 日 (派遣先により帰国日が異なる) である。2013 年度は予算縮小により

17名が参加、13校へ派遣した。4年生が関係する教員採用試験の時期に配慮するため、前半後半に分かれての実施とした。前半は主に2,3年生(8名)で8月2日から24日にブリズベンにて実施し、後半は4年生(9名)が8月24日から9月14日までメルボルンにて実習を行った。

表1：派遣の過程(2011年度～2012年度)

日付	内容	担当	詳細
2011年 8月	文部科学省にてプレゼンテーションを行った。	高橋	目的：「教員養成大学で、グローバル人材を育成するための研究」として、「海外で教育実習を実施する活動計画」についてのプレゼンを行った。
2011年秋	派遣校の検討開始	Ryan	オーストラリアの学校に受け入れ校を募った。オーストラリア現地教育委員会訪問した。
2011年 年度末	海外教育実習採択		愛知教育大学が採択された。
2012年 4月	募集開始	Ryan	英語教員免許を取得する学生(英語選修、英語専攻、国際文化)に対して面接のアナウンスを行った。
5月2日 9日	学生面接実施	高橋 Ryan Robins	<選考基準> 英語専攻、国際文化において、海外派遣を望む学生を募集し、①教員採用試験を受けること、②英語運用能力、③英語指導能力、④日本文化を発信し、指導する能力、等について面接試験により選考した。27名応募、21名決定した。
6月	ブルーカード申請	小中英語支援室	ブルーカード...オーストラリア・クイーンズランド州で未成年(18歳未満)の子供に携わる活動をする際に所持しなければならない登録証を申請した。
7月	健康管理オリエンテーション	小中英語支援室	海外渡航中の健康面の講習を受けた。
7月	取材	小中英語支援室	中日新聞、日本教育新聞の取材を受けた。
8月24日 25日	出発	Ryan Robins	<学生の渡航期間内訳> 8/24～9/18 2名(メルボルン) 8/24～9/16 12名(ブリスベン) 8/25～9/16 7名(ブリスベン)

9月16日 18日	帰国	Ryan Robins	
12月22日 23日	活動実施報告	小中英語 支援室	愛知教育大学 小中英語教育支援部門主催 小中高英語教育教員研修会にて、派遣参加学生 3名（任意）がワークショップとして個々の実 習の成果を発表した。



<図1> 2012年8月23日「中日新聞」に取り組みが掲載された。

表2：派遣の過程（2013年度）

日付	内容	担当	詳細
2013年 4月	オーストラリアにて事前視察、派遣校の選定、及び、交渉	Ryan	昨年度の実績、及び、反省を下にして、現地にて今年度の派遣校を選定した。派遣校（ホームステイ先等含む）選定した。
5月22日	学生面接	高橋 Ryan Robins	派遣学生を17名決定した
5月末	派遣校決定	Ryan	派遣先候補先との交渉で、派遣校が決定した。
6月4日	ブルーカード申請	Ryan 小中英語 支援室	ブルーカードを申請した。
6月5日	旅行会社との打ち合わせ	Ryan	旅費等の関係について、財務の協力を得て打ち合わせを行った。

6月6日	国際交流センターに提出物、健康管理オリエンテーションの詳細確認	小中英語支援室 ↓ 本学国際交流センター	学生の渡航に伴う書類（留学届け、パスポートのコピー）などについて確認した。
7月10日	事前指導①	Ryan Robins 小中英語支援室	1.現地校にて行う授業についての説明および授業の指導方法について教えた。 2.渡航の際に必要な書類や緊急時の対応に関する説明をした。
7月17日	事前指導②	Ryan Robins	現地校にて行う授業について、事前指導を行った。パワーポイントなどを活用したプレゼンテーション等の指導も行った。
7月24日	事前指導③	Ryan Robins 小中英語支援室	1.現地校にて行う授業についての事前指導及び、最終確認を行った。 2.旅行会社による渡航説明 3.本学保健環境センターより健康管理オリエンテーションや、朝日新聞社からの取材等を受けた。
8月2日 ～24日	前半組オーストラリア出発 →帰国後、事後指導	Ryan Robins	<学生の渡航先と期間> 8/2～8/24 8名（ブリスベン） 引率教員2名はこの間、適宜滞在し派遣校を巡回した。
8月24日 ～9月14日	後半組オーストラリア出発 →帰国後、事後指導	Robins Ryan	<学生の渡航先と期間> 8/24～9/14 9名（メルボルン） 引率教員2名はこの間、適宜滞在し派遣校を巡回した。
10月30日	朝日新聞（夕刊）にて記事掲載	小中英語支援室	7月24日に取材を受けたオーストラリア派遣に関する記事が掲載された。
12月21日 22日	活動実施報告	小中英語支援室	愛知教育大学 小中英語教育支援部門主催 小中高英語教育教員研修会にて、派遣参加学生9名（任意）がワークショップとして個々の実習結果を発表した。ランチョンセミナーも同時に開催した。

日本教育新聞 平成24年(2012年)9月3日(月曜日)

愛知教育大学
小教課程専攻の学生が海外教育実習に臨む。右側には海外教育実習の経験不足を解消するための「海外教育実習」の紹介が掲載されている。

教師を育てる
大学の挑戦

海外研修で幅広い視野を

オーストラリアで英語漬け3週間
教育実習の経験不足を解消



海外研修では日本の学校や文化を紹介する。アンソニー・ライアン准教授が学生の発表スライドを眺ながらアドバイスを送った

1 題目 教師を育てる
2 2ヶ月間の海外教育実習
3 題目 海外教育実習

<図2>
2012年9月3日
『日本教育新聞』
掲載記事
「教育実習」の経験をより積むために、この事業を実施したことが詳しく述べられている。

3.2. 派遣学生および現地での実習の様子（2013年度）

2013年度の海外教育実習には、本学教育学部中等教育教員養成英語専攻・選修、国際文化コースの学生で英語教諭を目指す学生17名が参加した。派遣学生の選考は、高橋、海外教育実習のオーガナイザーであり引率教員の Ryan、同じく引率教員で学生の事前指導の補佐などを務めてきた Robins の3名による面接によって選ばれた。選考基準は(1)教員採用試験を受けること、(2)英語運用能力、(3)英語指導能力、(4)日本文化を発信し、指導する能力の4つであり、英語運用能力に関しては大体 TOEIC スコア 700 程度を目安とした。

8月2日～8月24日に8名5校、8月24日～9月14日に9名8校と2グループに分けて派遣し、現地の13校の小中高等学校にて授業補佐などの教育実習、ホームステイを行った。ホームステイは各派遣校と Ryan がアレンジをした。表5は、2013年度の海外教育実習に参加した学生たちの学年、専攻、留学経験を示している。17名のうち、留学経験の全くない学生は5名、6ヶ月未満が7名、6ヶ月～1年未満が4名、1年以上が1名であった。

オーストラリアでの3週間の滞在では、主に平日はそれぞれの派遣先で実習に励み、土日はホームステイ先のホストファミリーと出かけたり、ある学生は派遣校での2泊3日のキャンプに参加したりするなど各々に充実した時間を過ごした。派遣校はほとんどが小学

校であり、ほとんどの学校が9:00頃始業で、15:00頃終業であった。学校では、各学年やクラスを回った学生もあれば一つの学年に配属されたり、市内の学校を複数回訪問したりと派遣先によって様々であったが、適宜授業補佐として積極的に派遣校の生徒たちと関わっていった。派遣が決まってから熱心に準備してきた日本文化を紹介するプレゼンは、何度も発表する時間を設けられたため、学生たちは回数を重ねながら各自のプレゼンを改良していった。



< 図 3 >

2013年10月30日

『朝日新聞』

英語教員を目指す学生に、英語コミュニケーション能力、英語の指導実践力、日本文化の発信等をオーストラリア教育実習で実施したことが掲載されている。

以下の写真は、2012年度より実施されたオーストラリア教育実習の様子である。



<写真1>

日本語の授業に補佐役で
実習を行った。



<写真2>

折り紙で日本の着物について
紹介している。



<写真3>

「ももたろう」の紙芝居（自作）
を自動に見せている



<写真4>

伝統的な「ふくわらい」の遊びについて
体験的な活動で行っている。



<写真5>

「富士山」を貼り絵で作る活動

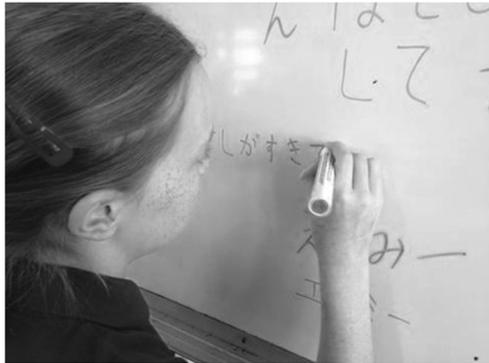


<写真6>

学生の手作り「あいうえお」カルタ。これを使って「カルタ遊び」を行った。



<写真7> 習字のお手本を示す



<写真8>

日本語で文章を書く練習のサポート



<写真9>電子黒板で、日本文化「おむすび」の紹介。「ICTの利用、iPadや電子黒板、プロジェクターの活用は子どもの興味を惹き、創造力を高めることがわかった。」
(学生の感想より)



<写真10> 電子黒板を活用した日本語指導も！



<写真11>

日本語話者として、自らが発話のモデルとなって指導している。



<写真 12>

高学年の授業でのサポート役として
 今回のオーストラリアで **All English** で授
 業をするという経験ができたことで英語を
 使って授業をすることに抵抗がなくなりました。また、オーストラリアの先生が使っ
 ていた教室英語や教え方など、これから自
 分が英語を教えるにあたって取り入れてい
 きたいことをたくさん発見することができ
 ました。(学生の感想より)



<写真 13>

授業で日本と最も違うことは「点数を取
 る」ことではなく、「自ら気付き、学び、
 勉強を楽しむ」システムが確立されてい
 るということがわかりました。

(学生の感想より)

表 5 : 参加学生一覧 (2013 年度)

学生	学年	専攻	留学経験	場所	学校名	期間
A	2 年	中等英語	なし	BRISBANE	St Mary MacKillop, Birkdale	8 月 2 日～ 8 月 24 日
B	3 年	初等英語	3 週間	CALOUNDRA	Unity College, Caloundra	
C	4 年	中等英語	6 ヶ月 3 週間	BUNDABERG	St Joseph's Bundaberg, Qld	
D	2 年	中等英語	なし	BUNDABERG	St Joseph's Bundaberg, Qld	
E	2 年	中等英語	3 年 6 ヶ月	BUNDABERG	St Patrick's, Bundaberg, Qld	
F	2 年	中等英語	なし	BUNDABERG	St Patrick's, Bundaberg, Qld	
G	3 年	国際文化	2 週間	BUNDABERG	St Mary's, Bundaberg, Qld	
H	3 年	国際文化	1 ヶ月	BUNDABERG	St Mary's, Bundaberg, Qld	

I	4年	国際文化	3週間	BRISBANE	Iona College, Wynnum West, Qld	8月24日～ 9月14日
J	4年	国際文化	なし	MELBOURNE	St Joan of Arc, Brighton, Vic	
K	4年	国際文化	1ヶ月 1週間	MELBOURNE	Stella Maris School, Beaumaris, Vic	
L	4年	国際文化	10ヶ月	MELBOURNE	St Joseph's, Black Rock, Vic	
M	4年	国際文化	9ヶ月 3週間	MELBOURNE	Sacred Heart, Sandringham, Vic	
N	4年	国際文化	3週間	MELBOURNE	St Kevin's College Junior School, Toorak, Vic	
O	4年	中等英語	6ヶ月	MELBOURNE	Mother of God, Ivanhoe East, Vic	
P	4年	初等英語	なし	MELBOURNE	St Peter's, East Bentleigh, Vic	
Q	4年	中等英語	9ヶ月	MELBOURNE	St Peter's, East Bentleigh, Vic	

中等英語…教育学部中等教育教員養成英語専攻
 初等英語…教育学部初等教育教員養成英語選修
 国際文化…教育学部現代学芸課程国際文化コース

3.3. 海外教育実習報告会

2012年度、2013年度については、帰国後、それぞれの成果をまとめて授業で報告するだけでなく、12月21日および22日に開催された「愛知教育大学教育創造開発機構 教員養成高度化センター 小中英語教育支援部門主催 小中高英語教育教員研修会」にて、ポスターセッションと口頭発表の一つとして、各自が実習したことについての体験を報告した。派遣学生の発表を通して、研修会参加者に、本学がこのようにして学生を異文化や海外の教育に触れさせ、様々な経験をさせることでグローバル化の波に対応できる人材育成の研究に注力していることを伝える事が出来た。

2014年度については、2015年1月21日に、特別経費プロジェクト「グローバル人材育成を主軸とした教員養成等プログラムの開発・海外教育実習、体験型教育及び、英語コミュニケーション能力と指導力養成カリキュラムの構築」の「講演会・報告会」を開催し、「海

外の教育実習の報告会」として、グループで発表を行った。この報告会の内容は、(1) 教育大学に適した海外教育実習のあり方（高橋美由紀）、(2) オーストラリアでの教育実習プログラムの概要（Ryan Anthony）、(3) 海外教育実習の実際、グループ発表（1）（2）（3）、(4) 質疑応答を行った。また、2014年度から現在までの取り組みについて、2015年8月29日から31日までの **The JACET 54th (2015) International Convention**（JACET 第54回国際大会）テーマ：「グローバル時代の異文化間コミュニケーション能力と英語教育」、鹿児島大学群元キャンパスにて、国際大会特別企画「グローバル人材のための大学英語教育の取り組み」にて、実践発表を行った。さらに、2015年10月31日から11月1日までの第10回東アジア教員養成国際シンポジウム(The 10th East Asia International Symposium on Teacher Education)、テーマ：「グローバル時代における教員養成の高度化」、名古屋国際センターにて実践発表を行った。

なお、2015年度については、2015年11月18日に報告会を開催した。詳細については、本報告書に掲載しているためここでは割愛する。

3.4. オーストラリア海外教育実習 アンケート結果

参加者に帰国後、アンケート調査を実施した。

実施年度：2012年度、2013年度、2014年度、2005年度

協力者数：2012年度 7名／派遣人数 21名

2013年度 17名／派遣人数 17名

2014年度 20名／派遣人数 20名

2015年度 19名／派遣人数 19名

調査内容と結果：

I. オーストラリアでの教育実習について、番号を記入して下さい。

5：強く思う 4：思う 3：ふつう 2：思わない 1：強く思わない

		評価	派遣年度				合計	有効回答 人数
			2012年	2013年	2014年	2015年		
1	海外での教育実習に参加して良かったと思う。	5	7	17	20	19	63	63人
		4	0	0	0	0	0	
		3	0	0	0	0	0	
		2	0	0	0	0	0	
		1	0	0	0	0	0	

2	参加したことで、自身の英語コミュニケーション能力が向上したと思う。	5	5	9	4	5	23	63人
		4	2	5	13	11	31	
		3	0	2	3	2	7	
		2	0	1	0	1	2	
		1	0	0	0	0	0	
3	参加したことで、英語を人前で話すことに自信がついたと思う。	5	5	9	6	5	25	63人
		4	2	5	11	9	27	
		3	0	3	3	5	11	
		2	0	0	0	0	0	
		1	0	0	0	0	0	
4	参加したことで、英語で生徒や児童に指導することに自信がついたと思う。	5	1	5	2	4	12	63人
		4	4	8	15	7	34	
		3	1	2	3	7	13	
		2	1	2	0	0	3	
		1	0	0	0	1	1	
5	参加したことで、自身の授業実践指導力が向上したと思う。	5	2	4	8	1	15	63人
		4	4	9	9	11	33	
		3	1	3	3	6	13	
		2	0	1	0	1	2	
		1	0	0	0	0	0	
6	参加したことで、今後、日本の英語の授業に役立てることができると思う。	5	5	10	14	9	38	63人
		4	2	4	4	8	18	
		3	0	3	2	2	7	
		2	0	0	0	0	0	
		1	0	0	0	0	0	
7	参加したことで、日本の言語・文化についても詳しく勉強したいと思う。	5	5	11	16	11	43	63人
		4	1	5	1	3	10	
		3	0	1	2	3	6	
		2	1	0	1	0	2	
		1	0	0	0	2	2	

8	参加したことで、グローバルな視点から、児童・生徒を指導することができると思う。	5		10	9	6	25	56人
		4		5	8	7	20	
		3		2	2	6	10	
		2		0	1	0	1	
		1		0	0	0	0	
9	参加したことで、より一層、英語の学習をしたいと思う。	5		17	19	17	53	56人
		4		0	1	2	3	
		3		0	0	0	0	
		2		0	0	0	0	
		1		0	0	0	0	
10	教師になった時に、この海外教育実習のことを児童や生徒に体験を話したいと思う。	5		16	18	19	53	56人
		4		0	0	0	0	
		3		1	2	0	3	
		2		0	0	0	0	
		1		0	0	0	0	

※2012年度アンケートは、問7までで構成されていました。

【理由の記述から】

海外教育実習の参加に関しては、参加者全員が5評価をつけている。オーストラリアでの教育実習という体験を通して、見るもの感じるもの、学んだことなど、自分が得たものは非常に大きいと感じている。そして、項目10の「教師になった時に、この海外教育実習のことを児童や生徒に体験を話したいと思う。」についても大半の学生が5の評価をしている。これらのことから、学生が体験を通して自ら学んだことを児童や生徒の指導に活かそうと思っていることが認識できる。

一方、アンケート項目2から項目5、及び、項目8の「参加したことで、自身の英語コミュニケーション能力が向上したと思う。」「参加したことで、英語を人前で話すことに自信がついたと思う。」「参加したことで、自身の授業実践指導力が向上したと思う。」「参加したことで、グローバルな視点から、児童・生徒を指導することができると思う。」において、彼ら自身の能力向上に関しては、評価にばらつきが見られた。これは、参加した学年によっては、日本での教育実習も終えておらず、オーストラリアでの教育実習が初めてという学生も多くいた。そのため、オーストラリアという異文化での学校体験と英語でのコミュニケーション体験を通じて、自分の力のなさを感じた学生と、現地でのホストファミリーやスタッフに支えられ頑張った自分を感じた学生と、自己評価が分

かれたと思われる。また、項目6の「参加したことで、今後、日本の英語の授業に役立てることができると思う。」においても同様に、教育実習の有無によって回答が異なっていると考えられる。

項目7「参加したことで、日本の言語・文化についても詳しく勉強したいと思う。」及び、項目9「参加したことで、より一層、英語の学習をしたいと思う。」では、大半の学生が5と4の評価であった。これは、グローバル化に対応した新たな英語教育の目標である「英語コミュニケーション能力の向上」や「我が国や郷土の伝統や文化について 英語で伝えること」を指導できる教員の育成としては効果があったことを示している。

これらのことから、本プロジェクト事業の目標である、学生の「実践指導力（英語コミュニケーション能力と授業の指導力、異文化理解教育）」の向上を図ることはおおむね達成できた。

2014年度アンケートより、自由記述文についてのまとめ

良かった点

- ・ 日本の教育とオーストラリアの教育の違いを実際に体験して、学ぶことができて良かった。(2名)
- ・ 日本と違う教育スタイルを見て自分が授業を行う際に参考にしたいと思うものを学ぶことができた。
- ・ ICT教育が非常に盛んだった。
- ・ 教師と保護者のつながりがより強く、とても素晴らしい環境だなと感じた。
- ・ ホストファミリーがとても親切だった。(2名)
- ・ 自分の英語に対するモチベーションが上がった。(2名)
- ・ 自らの視野を広げる事ができた。
- ・ 15回の授業をさせていただいて、自分の授業力に自身がついた。
- ・ 私にとってとても貴重な経験であり、大きな挑戦であった。
- ・ オールイングリッシュでの授業をさせてもらえるということは、とても素晴らしい経験。
- ・ 自身の英語力を試すことができ、自分の英語も通じるのだという自信がつき、ますます英語が好きになった。
- ・ 他のことにも挑戦をしていこうというモチベーションを高めることができた。
- ・ 将来小学校の外国語活動を行っていくときに役に立つような子供たちへのフィードバックの言葉やクラスルームイングリッシュを学ぶことができた。

反省点・課題点

- ・ もっと初めから積極的に英語を使うべきだった。(2名)
- ・ もっと耳を慣らしておくべきだった。
- ・ 躊躇して疑問に思ったことを質問できなかった。

- ・ 間違っても良いから英語を使い続けていく事が大切。
- ・ 日本でもっと用意していった授業案と、現場で求められたものが違ったのもっと考えて用意していけばよかった。
- ・ 日本を旅立つ前にもっと英語を勉強していくべきだった。
- ・ 自分自身がちゃんと日本について知識をもっていなくてはならない。(4名)
- ・ もっと多くの会話をすればよかった。
- ・ 学校の授業を把握するために、受け入れていただく学校の担当の先生などと予め情報交換などが行えると良いと思った。(3名)
- ・ 質問に対して英語で答えなければならないため、かなり周到に準備しておかなければ厳しい。
- ・ 多くの学生がこの教育実習に参加できるようにしていただきたい。もう少し早くこの教育実習に参加していれば、長期の留学について考える事ができ、より勉強に励む事ができると思う。(4年・女)
- ・ 先生方とのコミュニケーションが少なかった。(2名)

3.5. Anthony Ryan による Student Reflections (2013,2014)

「4. How you think the entire experience will help you in the future」

紙面の関係上、上記の回答について印象深いものを挙げる。

- ・ 英語は教科ではなくてコミュニケーションの手段の1つであることを学んだ。外国の人々と話がしたいから、一緒に笑い合いたいから、互いの文化を共感したいから、英語を勉強するのだ。このことを教員になったときに生徒に伝えていきたいと思う。
- ・ 日本との外国語学習を取り巻く環境の差(機材等)を感じながら、外国語学習という観点から日本で英語を教える際に有効な手段を学ぶことができました。例えば手話とリンクした朗読劇などは実践してみたく思います。また、電子機器の使用方法和実際の授業での役割について詳しく学ぶことができよかったです。これは日本で次第に普及しつつある電子機器を、向こうと同じクオリティで使用することにつながると思うからです。
- ・ 英語の教師にとって、英語の知識はもちろんですが、自分の国に関する知識を含めておくことが大切だと実感しました。
- ・ 今回の実習を通し、教師が働きかけることばかりが指導ではなく、生徒が自分で情報を集め、学習できるように指導していく方法も学ぶことが出来ました。
- ・ この実習でコミュニケーション力とは何なのかと考えました。発音、流暢さなど、英語を話す際に、様々な観点がありますが、僕は大切なことは伝えようとする事だと感じました。



- ・私が日本でできことは、今回の経験で学んだことを生かし、将来の日本の子どもたちへ伝えること、そしてその子どもたちのために教育につなげることです。
- ・海外でどのように英語や外国語が教えられているかというのはとても役立つと考えています。チャンツへの導入の仕方や、英単語を学ぶ方法などはとても興味深かったです。また、子どもの注目を集めるためのフレーズや、子どもへの声掛けの仕方など、教師による声掛けのバリエーションを増やす良いきっかけになったと感じています。
- ・日本人英語学習者に足りないのは、積極性だと実感しました。文法にとらわれ、ミスを恐れ、話すことにためらってしまっています。ミスを気にせずに、自分の考えをどんどん話してみることが大切です。伝えようという必死な気持ちは、必ず相手にも伝わります。将来私が、小学校・中学校のどちらで教師になっても、積極的に話すことを大切に英語の授業をしていきたいと思いました。



・ホストファミリーや学校教師との触れ合いを通じて、自らの価値観をより広げることが出来たと考えています。今まで政治や経済、文化的な事柄についてじっくりと海外の人と直接話し合ったことがなかったため、とても貴重な経験となりました。こうした事柄は、直接将来子どもにいうことは無いと思いますが、少なくとも教師として経験し、知っておくべきことであると考えています。

4. 課題と展望

海外教育実習は、「教員養成大学の特性を活かし、グローバル化に対応した教育ができる人材、及び社会人を養成するため、相互依存の理解、地球的課題の理解、多文化教育、国際共通語等のグローバル教育と、英語コミュニケーション能力と指導力養成のカリキュラムを構築すること」を目的として、具体的には、相互依存の理解、地球的課題の理解、多文化教育等のグローバル教育を踏まえて、フィールドワーク等の体験型教育及び、英語コミュニケーション能力と指導力養成カリキュラムの構築を目指して実施されてきた。「グローバル時代に適した指導力養成」として、英語専攻の学生だけでなく、英語の免許取得予定である、日本語教育の学生や選修（初等教育）の学生（小学校英語は担任が指導する）等にも、この事業への参加の機会を与えてきた。しかしながら、大学全体としてみれば参加できたのは僅かな人数である。英語で現地の教員等とコミュニケーションを図ることができる能力は必要不可欠であり、そのために参加することができない学生も多数いる。

今後の課題としては、英語だけでなく、他教科の教師志望の学生も海外教育実習に参加できるように、(1)学生達の英語コミュニケーション能力を大学全体でレベルアップさせること、(2)英語や異文化、海外に興味・関心を持たせること、(3)他教科の教員との連携を図り、他教科の内容を英語で指導する方法を習得させること等が挙げられる。また、日本での教

育実習の経験の有無は、実際の指導やプレゼンテーションの時に大きく影響をしていた。英語で指導する以前の問題であるが、教育者としての資質や、子どもたちの前でわかりやすく話すこと等、「教師」としての基本的なスキルを身につけておくことである。さらに、日本語・日本文化について、きちんとした学習も必要である。

この海外教育実習に参加した学生達は、文部科学省が「グローバル人材」の要素として示した、(1)語学力・コミュニケーション力、(2)主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感、(3)異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティー、について、かなり向上したと思われる。さらに、彼らが教員として将来、子どもたちを教える立場になった時に、この実習で学んだ様々な経験を活かして指導することができる。

本プログラムに参加した学生たちが、「グローバル時代の先導的な教育者」としての役割を担ってくれることを願っている。

本稿は **The JACET 54th (2015) International Convention** (JACET第54回国際大会)の「グローバル人材のための大学英語教育の取り組み」の発表に加筆修正したものである。

参考文献

- Anthony Ryan、高橋美由紀、Anthony Robins (2011)「2011年度 2011年度学長裁量経費(プロジェクト経費)公募申請書類.
- 愛知教育大学外国語教育講座(2011)「特別経費(プロジェクト分【継続事業】)進捗状況報告書及び平成25年度所要額調(高度な専門職業人の養成や専門教育機能の充実)」
- 愛知教育大学外国語教育講座(2012)「特別経費(プロジェクト分【継続事業】)進捗状況報告書及び平成26年度所要額調(高度な専門職業人の養成や専門教育機能の充実)」
- 愛知教育大学外国語教育講座(2013)「平成26年度特別経費(プロジェクト分【新規事業】)所要額調(高度な専門職業人の養成や専門教育機能の充実)」
- 愛知教育大学外国語教育講座(2014)「平成27年度特別経費(プロジェクト分【継続事業】)所要額調(高度な専門職業人の養成や専門教育機能の充実)」
- 文部科学省(2011)「第2回グローバル人材育成推進会議」配布資料. 2011年6月22日.
- 高橋美由紀、Anthony Ryan、稲垣真由美、加藤都佳沙(2014)「グローバル化に対応した教員養成～海外教育実習プログラム～」愛知教育大学外国語教育講座『愛知教育大学から発信するグローバル時代の英語教育』鳴海出版.

グローバル化に対応した 教員養成

高橋美由紀
(外国語教育講座)



海外教育実習プログラム実現のために

- 2010年度
文部科学省特別経費プログラム「小学校外国語活動を前提とした小・中・高での英語関連科目の連携を進める英語教員養成カリキュラムの開発と授業実践力を高めるための教育改革」(特別経費プログラム)が採択

海外教育実習プログラム実現のために

- 2011年度
高橋, Anthony Ryan, Anthony Robins
学長裁量経費「研究支援経費」に応募
「国際交流や学生の海外派遣において教員養成大学が国際化に果たす役割の研究」

教員養成大学における国際化のあり方の一つのモデルを示すことである。

具体的には、国際交流や留学を通して、それぞれ母語教育の授業のアシスタントやチーム・ティーチングの形で、現場の教育に関わることを目指す。

<高橋>

Ironside State School (オーストラリア・クイーンズランド州)で、インドネシアの学生が、英語とインドネシア語を通して、海外での教育実習を行っていたことの調査研究、及び、現地で日本語教育の指導を行った経験による日本語教育についての研究。及び、シンガポール教育大学等の教員等との交流から、海外での教育実習についての情報を得ていた。

<Anthony Ryan>

これまで長年、オーストラリアに英語専攻の学生を引率し、学生の英語力の向上と異文化理解教育を通じた研究。及び、オーストラリアの大学や小中学校の教員等との交流から、海外での教育実習についての情報を得ていた。

<Anthony Robins>

英国Newman大学での学生派遣を通して異文化コミュニケーション等の研究



海外派遣の学生が教育実習を体験できる内容の留学プログラムを実施し、教育大学の海外派遣のモデルとして提案することを実践学研究として実施しようとしていた。

文部科学省「グローバル人材」の概念

- (1)語学力・コミュニケーション力
- (2)主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感、
- (3)異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティー、の要素があることを示した。

課題として、2004年以降、海外へ留学する日本人学生の数が減少していることを挙げ、グローバル化時代に相応しい大学教育の確立、高等教育の国際展開の推進を一つとして挙げている(文部科学省、2011)。

文部科学省の趣旨で「グローバル人材」育成の要望書作成

- ・ 2011年6月に、愛知教育大学白石理事・事務局長より「世界に通用する、(将来)小中高校生を教える大学生の英語能力を有する人材育成」の趣旨で要望書作成をすることを、高橋に依頼された。

「グローバル化時代の人材育成の推進に寄与するために、大学生の留学経験者が小中高の教育現場で異文化体験を効果的に活かす機会を充実させる。」ことを主張した。

海外教育実習プログラム実現のために

文部科学省での提案

日時:平成23年8月11日(木) 14:00~ (2時間程度)

場所:文部科学省大学振興課教員養成企画室

出席者:東京学芸大学、大阪教育大学の副学長、担当者等。

愛知教育大学

白石理事・事務局長、岩崎理事、高橋美由紀、福井財務課長

用務:「平成24年度概算要求特別経費(プロジェクト)小学校外国語活動に係る打合せ」

内容:東京学芸大学の提案「帰国子女教育とグローバル化」
大阪教育大学の提案「マルチメディア教材を活用した、全学における英語力向上のシステム開発、教職員及び学生の海外派遣他」
愛知教育大学の提案「グローバル人材育成を担う大学教育の確立、とりわけ、教員養成大学の特性を活かし、大学と海外の学校現場との連携を通して、有効な英語コミュニケーション活動の創造と授業モデルの開発を行うこと、併せて、世界に通用する英語能力を有する実践力のある教員養成を行うことについてのプログラムの提示」

グローバル人材育成を主軸とした教員養成等プログラムの開発

—海外教育実習、体験型教育及び、英語コミュニケーション能力と指導力養成カリキュラムの構築—

「愛知教育大学教員養成等グローバル推進会議(仮称)」
国際理解教育及び留学プログラムを開発及びコーディネート

1. 英語教員養成プログラム
海外での教育実習、オンライン学習支援 等

2. 留学プログラム

3. 短期交流(ショートビジット)プログラム

グローバル人材育成を主軸とした教員養成等プログラムの開発

—海外教育実習、体験型教育及び、英語コミュニケーション能力と指導力養成カリキュラムの構築—

背景・課題

自民党教育再生実行本部

「グローバル人材育成のための世界最高水準の学力の実現」英語教育の抜本改革を「教育再生3本の矢」の一つに掲げる。

英語教育の学習指導要領改訂

2011年度:小学校で外国語活動が高学年で必修化、2012年度:中学校の英語の授業が週1時間増加、

2013年度:高等学校「英語の授業は英語で行うことを基本とする」

教育現場では、国際感覚に優れ、児童や生徒に4技能を総合的に育成するための指導ができる教員が一層求められている。

目的・ねらい

教員養成大学の特性を活かし、国際社会で活躍できる人材育成

- ・「グローバル教育及び、英語コミュニケーション能力と指導力養成カリキュラム」の構築
- ・海外での教育実習、留学・短期交流プログラム等の開発・拡充及び機会を付与
- ・TOEFL等による将来の教員の英語力育成と評価の研究開発プログラムを構築
- ・聴覚障害者や英語が苦手な学生等の支援プログラムを構築

効果

国際化する教育現場で活躍できる人材を育成
「国際的な視野と理解力」、「高度な英語指導力」を持つ教員を養成



海外教育実習の学生派遣の実際

- 2012年の初回派遣に至る2年以上前からAnthony Ryan先生の尽力により、現地オーストラリアの教育委員会、学校長と密に連絡のやり取りがあつて実現された。4月の段階での事前視察(現地での教師経験による人脈も生かしながら慎重に派遣校が選定された。)

平成26年度 特別経費(プロジェクト分)

<事業名>

グローバル人材育成を主軸とした教員養成等プログラムの開発ー 海外教育実習、グローバル教育、フィールドワーク等の体験型教育及び、英語コミュニケーション能力と指導力養成カリキュラムの構築ー

<事業概要>

国際社会で活躍する人材を育成するために、海外教育実習、海外留学・海外短期交流プログラムの開発・拡充及び機会を付与する。

取組内容の概要

教員養成大学・大学院における国際化を促進するために、国際交流センターの支援のもと、以下の7つの柱から成る。

- 1) 昨年度から取り組んでいる大学と海外の学校現場の連携による「海外での教育実習」をアジア諸国や英語圏へと拡充し、グローバル教育及び、高度な英語コミュニケーション能力と指導力養成を一体化した新たなカリキュラムの構築

取組内容の概要

- 本学学生と海外の教育現場の教員・児童生徒・現地の学生達との交流は、日本の高等教育機関における国際化の促進に資するとともに、教員養成大学として、グローバルな視野を持つ教員養成プログラムの開発

事業達成による学問的効果

- 1) 本事業は、グローバル人材の育成として、学生が海外における実践的な指導力を身につける契機となり、国際化しつつある学校現場に対応できる能力を育成する機会が得られる。
- 2) 海外教育実習プログラムのために、①相互依存の理解、地球的課題の理解、多文化教育、及び、国際共通言語である英語、英語内容学等、グローバル教育に重要な専門的な知識等、②コミュニケーションに関する理論、③ティンクアスタ等の講義や日本文化を含めた世界の文化の多様性を学ぶための研究とカリキュラム開発、④日本人としてのアイデンティティを持ってグローバル化に対応する教育として、日本語教育や日本の伝統文化についての知識や理解を深めるためのプログラムを構築することができる。
- 3) 実践から得られる知見と第二言語習得理論に基づき、英語教育の指導方法の研究と開発を行うことができる。
- 4) グローバル化時代に相応しい大学教育の確立として、アジア諸国や英語圏の姉妹校等との連携を図り、国際展開を推進した教育内容や教育方法の共同研究と開発を行うことができる。
- 5) 国際感覚に優れた人材を育成し、世界に通用する英語コミュニケーション能力に支えられた実践的指導力を向上させるためのリカレント教育の拡充を図ることができる。
- 6) 英語の評価のあり方や、チームティーチング等、実践指導力についての研究と開発を行うことができる。
- 7) グローバル化を英語教育に特化せず国際理解教育を深めるため他の教科専攻者にも海外での経験を積ませる。

事業達成による社会的効果

- 1) 日本の高等教育機関の国際化の促進に資するとともに、グローバル社会に対応した「国際社会で活躍する人材の育成」の推進に寄与する。
- 2) グローバル人材の育成として、学生がグローバルな視野を身につける契機となり、教員採用後、国際化する学校現場に想定される課題に対処できる。
- 3) 教員養成大学の特性を活かし、国際的な視野で言語教育を指導でき、国際社会で十分に活躍できる人材を育成することをもって、教員養成を担う大学としてのアカウンタビリティ(説明責任)を果たす。
- 4) グローバル化時代の人材育成の推進に寄与するために、海外教育実習経験者が小中高の教育現場で異文化体験を効果的に活かす機会を充実させる。

International Exchange – A short study visit program for students from Newman University

Anthony Robins

(Department of Foreign Languages, Aichi University of Education)

Summary

This report describes a study visit by students from Newman University in England, a long-standing partner university of Aichi University of Education. The report first introduces the relationship, then explains the reasons for organizing this activity, before describing organization and funding. It then looks at the content of the study visit and finally considers the benefits and challenges of undertaking this activity and its lessons for the future.

1. Introduction

The study visit by six students from Newman University in Birmingham for three weeks in July 2015 was the latest development in the long relationship between Aichi University of Education (AUE) and Newman University (previously Newman College of Higher Education and then Newman University College). Organisation of that relationship began in 2002 and an agreement with Newman was made in 2003.

2. Reasons for the Study Visit

The main reason for organizing the study visit was to improve the balance of numbers between students going there from AUE and those coming to AUE from Newman. While well over twenty students AUE had stayed at Newman for either half a year or a year by 2015, in addition to a few short-term students, only one Newman student had come to AUE, staying for four months. Why was there such an imbalance? There were four main reasons. Firstly, unlike AUE students who have a background of English studies and a keen interest in going to Britain to improve their English, Newman students have no background in Japanese and are unsurprisingly not well-equipped to study at a university like AUE where the majority of classes are in Japanese. Secondly, with the increasing costs of university fees in England (now 9,000 pounds per year), Newman students do not want to extend their time at university by studying abroad which leads to extra costs. Thirdly, if Newman students do want to study abroad, it is more economical in Europe through the Erasmus exchange system, which provides funding for students who study in other European countries. Finally, the

modular structure of their courses and timetable for such matters as teaching placements makes it difficult from them to be away for long periods. Therefore, it increasingly seemed more positive to focus on a short stay program to encourage them to come to AUE.

3. Organisation and Funding

Initially, the planned program was explained and promoted during a visit to Newman by four AUE staff (3 academic and 1 administrative) in March 2014. Promotion was focussed on a centrally located stand at Newman, decorated with items from Japan, including photos and traditional clothing. The Newman catering staff kindly prepared some Japanese food, too. In addition, there were a number of meetings with Newman faculty members, about the short study visit and other possible exchange activities. It was decided not to aim for the study tour to take place in the summer of that year, but rather in summer 2015, to allow more planning time. An application was made for a JASSO (Japan Student Services Organisation) scholarship for a large group, with a decision expected in January 2015. Unfortunately, the result of that was delayed and ultimately unsuccessful. However, alternative funding, which was mainly part of a government grant for various English support activities, could be used, combined with some help provided from supportive AUE faculty members' research budgets. This enabled about half of the participants' costs to be covered. Finally, a smaller group of six students (3 females and 3 males) joined the study visit as participants. Due to problems in communication with Newman faculty members, arrangements were made directly with the Newman students by AUE staff including myself.

4. Study Visit Content

The study visit needed to provide a balance, so as to bring various benefits. It therefore needed to include: interaction opportunities with AUE students, academic benefits for the Newman participants, and cultural and travel opportunities for Newman participants, too. The full programme can be seen in Appendix 1. It shows that there were both more and less formal interaction opportunities. The former included a visit to my 4th year English Communication class (see A), while the latter included an 'International Café' event, one of a regular series organized by students and held after classes on a Friday (see B). Although it was initially expected that the participants would include teacher trainees, the six were actually four Business or Business and Ethics students and two Social Work students.





Therefore, academic content included a visit to the museum for Panasonic founder, Konosuke Matsushita, in Osaka (see C), a Toyota factory visit and presentation at AUE by an experienced former company manager on Japanese business and contrasts with business in other cultures. However, there were also visits to explore the Japanese educational environment and to again interact with Japanese students, both at high school and kindergarden. Obviously, visitors to Japan are keen to learn about the culture and to see the country more widely than just one area, given that it might be the only visit in their lifetime. Travel allowing exposure to culture took three forms: Firstly, accompanied by a faculty member, as with Osaka and Nagoya castles. Secondly, accompanied by a student, as with Kyoto, and finally, unaccompanied, as with Iga-Ueno in Mie Prefecture. Given language challenges, accompanying the group to help orientation in the early stages of the study visit was most necessary.

Travel in general encompassed arrival in the Kansai area, a short trip to Kyoto, a weekend in Nagano Prefecture, a visit to Iga-Ueno (mentioned above) and time in Tokyo before departure. While these provided cultural input, there was more specific cultural input while at AUE, with the assistance of a faculty member from the Japanese as a Second Language course, which included points such as shrine etiquette and an ikebana demonstration followed by the opportunity to try it (see D).

5. Benefits and Challenges

Feedback from the group of six was positive and one resulting success was the return to AUE of one of the group's members for a further two weeks' visit in January 2016. In addition, it at least indirectly influenced the decisions of another student and a faculty member who also came to AUE, for four weeks and one week respectively, in early 2016. The study tour also provided the opportunity for AUE students going to Newman in the future to make contacts and to encourage others to go. One of those AUE students is currently there.

There are now plans for a further similar study visit in summer 2016. Following meetings at Newman, which I coordinated in November 2015, thirty students have expressed interest. Funding was referred to at the start of this article. The result of an application for a JASSO scholarship is awaited at the time of writing. If successful, it will allow substantial support for participants. However, if the application proves unsuccessful, financial support will be limited to some contributions from individual faculty members' research budgets (*kojin kenkyuuhi*). This is a situation which will certainly make it less easy to attract participants. Therefore, a challenge is to attract alternative sources of funding. In the past, in cooperation with a Newman faculty member, we have applied for UK funding, such as the Prime Minister's Initiative for International Education,

being shortlisted but not ultimately successful. Other challenges include agreeing on an optimum time for future study visits, which successfully combines these factors: After Newman students have completed their academic year, avoiding times when AUE students are occupied with teaching practice, at a time which allows local school visits before their summer vacation, and even to avoid the really hot summer weather in the area!

6. Conclusion

The organization of an activity such as this study visit undoubtedly creates challenges and contributes to an increased workload. However, it has achieved the main aim, which was described earlier, of helping to better balance the relationship between Newman University and Aichi University of Education. Such a balance is essential for a positive relation. I therefore look forward to activities like the 2015 study visit, in the future.

Acknowledgements: I wish to thank the wide range of current and former colleagues who supported this study visit. In particular, I would like to thank two AUE students who had previously studied at Newman University and who gave invaluable assistance and support, Takayuki Nagamine and Yasutaka Nishio. I would also particularly like to thank Enkei Mano, who gave great support in homestay organization.

Appendix 1: Summary of the Newman Study Visit 2015

1. Aims

In order to encourage a more active interaction between Aichi University of Education and Newman University, a partner university in the UK, we are accepting six short-stay students. We are to offer them a wide range of opportunities of experiencing student life at AUE, interacting with our students, trying some traditional Japanese activities, and visiting local schools and study sites, through which we are sure of enhancing the partnership between both universities. We are also to provide our students with a lot of chances to mingle with the British students, with events at both administrative and student-centered levels.

2. Term

Arriving Kansai International Airport on **Monday, July 13**

~ Departing Tokyo Narita International Airport on **Saturday, August 1.**

(They stay in/around the university between **July 14 and July 30.**)

3. Key events (More can be found in the following section.)

Wednesday, July 15 Welcome Party 17:00~ (At UP, a canteen on campus)

Friday, July 17 International Café 17:00~ (At the Future Education Hall)

Wednesday, July 29 Farewell Party 17:00~ (At UP, a canteen on campus)

4. Itinerary

Mon, July 13	Arrival at Kansai International Airport.
Tues, July 14	Visiting some traditional sights in Osaka. Heading to AUE.
Wed, July 15	- School visit with international students to Toyohashi Commercial High School. - Welcome party, open to all the members of the university.
Thurs, July 16	- Traditional Japanese activities (including Calligraphy). - Visiting Nagoya Castle.
Fri., July 17	- Traditional Japanese activities (including Flower Arrangement). - International Café, open for students but registration required.
Sat, July 18 ~ Mon, July 20	Interacting with students, including homestay experience.
Tue, July 21 ~ Sun, July 26	Free time, including interacting with students living nearby.
Mon, July 27	- Visiting a kindergarten, observing Early Years education as well as how it is organised. - Involvement in two classes at the university: 3 rd : English Communication (MS), 4 th : English Communication

(F)

- Tue, July 28
- English Support Centre event for students using the room for English study.
 - Joining a lecture about Japanese business practice and ethics and international contrasts.
- Wed, July 29
- Toyota Factory Tour, accompanied by some Japanese and International students.
 - Farewell party, open for all the members of university.
- Thu, July 30
- Leave for Tokyo from where they depart. Staying in Tokyo (1 night)/Narita (1 night).
- Sat, August 1
- Departure from Tokyo Narita International Airport.

オーストラリア教育実習プログラム実施報告

Anthony Ryan・Anthony Robins・高橋 美由紀

長峯 貴幸・山田 美樹・稲垣 真由美

(愛知教育大学)

概要

愛知教育大学では、文部科学省特別経費プロジェクトの採択を受けグローバル人材育成に取り組んでいる。2012年度から毎年夏に行われているオーストラリア教育実習は、このプロジェクトの柱の一つとなっており、日本とオーストラリアの教育の違いを認識し広い視野を持ち主体的に行動できる学生を育てることを目的として行っている。ここでは運営面を中心にオーストラリア教育実習の概要を紹介する。またこのような大きなプログラムを実施するに当たりスムーズに運営していくためには、このプログラムに携わる全ての人々の理解と協力が欠かせない。そこで「英語サポートセンター」が運営の拠点となり、本学の実施担当教員、参加学生、大学内の各部署、旅行会社等をつなぐ役割を担っている。

キーワード 海外教育実習 運営体制 事前指導

1. これまでの取り組み

このオーストラリア教育実習プログラム(通称 ATP)は2012年度に始まり、今年度(2015年度)までに計4回行われている。時期は8月から9月にかけての夏休み期間中とし、対象となる学生は、英語免許取得予定の学生である。例年4月頃に募集し、面接により選考している。表1は、2012年度から2015年度までの学生の派遣人数、実習校数、期間、参加費用である。概ね20名前後を派遣しており、実習校はクイーンズランド州とヴィクトリア州にある現地の小中高生が通う公立、私立の学校15校ほどで実施している。

表1. オーストラリア教育実習概要 (2012～2015)

	派遣人数	実習校数	期間	参加費用
2012	21	14	4W	0円
2013	17	13	3W	0円
2014	20	15	3W	70,000円
2015	19	12	2～3W	2W 65,000円
				3W 85,000円

参加学生の選考は、留学経験の有無を問わず意欲のある学生としているが、現地にて英

語で授業を行うことから、ある一定の英語力がある者としている。参加学生は3, 4年生が中心となるが、これらの学年は教育実習、教員採用試験、卒論中間発表等のスケジュールも同時に進行するため、派遣の時期と日程が重ならないよう毎年調整する必要がある。

また、このプログラムは文部科学省の特別経費プロジェクトにて実施するため、参加可能人数が予算の配当額により左右される。2012, 2013年度はこのプログラムを行うのに十分な予算が充てられたため学生の自己負担は現地での雑費を除いてほとんどなかった。しかし、2014年度からは大幅な予算削減となり、できるだけ多くの学生が参加できることを優先し、滞在費用の一部を徴収している。学生自己負担金は、渡航費用・為替レートや派遣期間を考慮し、参加費用として募集要項に明示している。

2. オーストラリア教育実習の概要 (2015年度)

2.1 運営体制

実施責任者であるライアン准教授と共に引率に携わるロビンズ教授が主に学生の指導とオーストラリアの学校との交渉を行い、渡航に関する手続きは英語サポートセンターのスタッフがサポートをしている。大学内は手続き内容ごとに部署が詳細に分かれているため、各部署に提出しなければならない書類が多く、渡航手続きに伴う膨大な事務処理が発生する。そのため英語サポートセンターでは、ライアン准教授と常に連携をとりながらオーストラリア海外教育実習に関する事務手続きを行っている。主に関わる部署は、国際交流センター、財務課、教務課、総務課、保健環境センターである。本実習が初めての海外渡航である学生も少なくはなく、学生が安心して参加できるよう心配な事は、ライアン准教授、ロビンズ教授と共に、英語サポートセンタースタッフにも相談できる体制をとっている。

2.2 事前指導

実習前の3ヶ月間は毎週3時間ほどのミーティング（渡航手続きを含む事前指導）を設け、学生は教員より実習にあたっての心構え、オーストラリアの教育事情、実習中のホームステイ先での生活についてなど様々なレクチャーを受けた。また以前にこのプログラムに参加した学生もアドバイザーとしてミーティングに参加し、授業のプレゼンテーションのテーマや授業方法についてサポートを行った。また渡航に関する手続きは英語サポートセンタースタッフが中心に行い、学生からの提出物管理、参加費の徴収、必要書類の作成などにあたった。出国が近くなると旅行会社の担当者も参加し、海外旅行保険の申込や出国、帰国の流れの説明もなされた。また保健環境センターからは、オーストラリア滞中に当たって健康面で注意することなど具体的な事例を交えながらレクチャーを受けた。

このように毎週ミーティングを行うことは参加学生にとっては負担なことではあるが、実習に向けての意識が高まり、十分な準備をしてから実習に望むという面で非常に重要な場である。また引率教員のみで全ての手続きを行うことはかなりの負担であることから、事務スタッフも関わりながらチームワーク良く学生のサポートに当たっていくこと

が重要となってくる。

2.3 渡航費用

このプログラムに関わる費用の内訳として、主に公費で支払われているものはオーストラリアまでの往復航空券、現地校に支払う実習費である。個人負担は、ホームステイ代、現地での移動費、海外旅行保険、ETAS、飲食、雑費などである。公費分私費分合わせてかかる費用は一人当たり 2 週間の場合 206,000 円、3 週間の場合 261,000 円である。このうち学生が負担する金額が大きくなるよう 10 万以内に収まるよう調整している。そのためには航空券の費用を抑えたり、引率費用を抑えるなどの努力が必要となってくる。特に航空券は時期や航空会社により大きく変わるため旅行会社を選ぶところから慎重に計画を練ることが重要である。

2.4 オーストラリアでの実習内容

学生はオーストラリアに到着するとすぐにホストファミリーの出迎えを受け、それぞれの家庭に滞在することになる。ホストファミリーは各学校に選定してもらうため、実習校の教員の家庭や通学している児童生徒の家庭であることが多い。そのため月曜日から金曜日まではホストファミリーと共に実習校に通うことになる。

学校には学生が 1, 2 名ずつ配置され、担当となるクラスに入り授業を行う。その他担当教員の指示のもと授業アシスタントを行い、その他にも学校行事に関わるなど実習内容は学校によって様々である。中には保護者会に参加させてもらうなど貴重な体験をした学生もあった。

このプログラムで特筆すべき点はこの実習校とホストファミリーが日本からの実習生の受け入れを好意的に行っていることである。その理由として挙げられるのはオーストラリアの元教員であるライアン准教授の人脈によって選定された学校であるためこのプログラム自体が信頼関係の上に成り立っており、双方にとってメリットをもたらすように設定されているからである。さらに謝金として、現地校にはスーパーバイザーに支払う費用として 30AUD（一日あたり）、ホストファミリーには 35AUD（一日あたり）支払うことで受け入れ側の負担軽減を図っている。

またライアン准教授は学生に対して日本の教育実習とは違い、初めから指導教官の指示を待つのではなく、教員の一員としての自覚を持ち、自ら考えて動くことが最も重要であると指導している。決まった実習カリキュラムがあるわけではないため受け身の姿勢で指示を待っては授業も持たせてもらえない。毎朝ミーティングを設定する、分からない事があれば積極的に聞く、授業内容について自ら提案するなどの最大限の努力が必要となってくる。これらを全て英語でコミュニケーションを行わなくてはならないため、その為の入念な準備と現地で臨機応変に対応できる力が重要である。

3. 海外派遣・国際交流報告会

帰国後学生には、それぞれが体験したことを写真や資料を紹介しながらプレゼン形式で発表を行うこととした。学生は各校1～2名ずつ配置されるため、現地でお互いの授業を見合うことができないため貴重な体験であると考え設定した。

平成27年11月18日に「平成27年度 海外派遣・国際交流報告会」として国際交流センターと外国語教育講座が合同で報告会を開催した。オーストラリア教育実習のほかに韓国の晋州教育大で短期交流プログラムの報告と、イギリスニューマン大学から6名の留学生が来日した際に本学で交流を行った報告も同時に行った。図1,2は2014年と2015年度の報告会の学生による発表の様子である。

図1. 報告会の様子(2014年度)



図2. 報告会の様子(2015年度)



4. 今後に向けて

グローバル人材プロジェクトは2015年度末をもって終了するため、次年度は新たな財源確保が急務である。これまでこのプログラムに参加してきた学生は80名ほどに及ぶ。これを足掛かりに長期海外留学や海外の大学院進学を目指す学生は少なくない。また多くの卒業生が教員となる本学にとってこのプログラムは、今後の英語教育を担う人材を育てる重要な場であるといえるであろう。

一方で、海外で実習を行うためには渡航の手続きや準備に多くの時間と労力を費やすことは避けられない。この取り組みを継続させていくには運営体制を確立し、これにかかわる多くの人の理解と協力が不可欠である。今後はこのプログラムを支えてくれた多くの方々に感謝の意を表しつつ、より良い取り組みとなるよう継続していきたい。

参考文献

高橋美由紀・Anthony Ryan・稲垣真由美・加藤都佳沙. (2014). 「グローバル化に対応した教員養成～海外教育実習プログラム～」『愛知教育大学から発信するグローバル時代の英語教育』(pp. 137-154). 名古屋：鳴海出版.

文部科学省 特別経費プロジェクト

「グローバル人材育成を主軸とした教員養成等プログラムの開発-海外教育実習、
体験型教育及び、英語コミュニケーション能力と指導力養成カリキュラムの構築-」

平成 27 年度 海外派遣・国際交流報告会

日時：平成 27 年 11 月 18 日（水）15:40～18:10

場所：愛知教育大学 教育未来館 3F 多目的室

主催：愛知教育大学外国語教育講座

参加費：無料(参加登録も必要ありません)



プログラム

15:30～ 受付（教育未来館 3F）

15:40～15:50 開会式

15:55～16:10 ニューマン交流プログラムの報告

「ニューマン大学（イギリス）来日交流プログラムについて」

16:15～16:40 国際交流センター海外短期交流プログラムの報告

「晋州教育大学校（韓国）での短期交流プログラムについて」

16:45～17:45 海外での教育実習報告

「オーストラリアでの教育実習プログラムについて」

17:55～18:05 閉会式

問い合わせ先：英語サポートセンター aue.english@gmail.com

ホームページ <http://www.aue-english.aichi-edu.ac.jp>

ニューマン大学交流プログラム 概要

1. 目的

本学との学術協定締結校であり、姉妹校である英国・ニューマン大学との交流の活性化のため、ショートステイとしてニューマン大学からの6名の学生を受け入れる。愛知教育大学での学生生活や本学日本人学生、留学生との交流、日本文化の体験、県内研修施設及び学校への見学を通じて日本での生活を実際に体験してもらい、今後のニューマン大学側からの長期留学を促進する。それと同時に、本学日本人学生との交流も積極的に行い、双方にとっての国際交流を実現する。

2. 期間

2015年7月13日(月) ～ 2015年8月1日(土)

(うち愛教大及び周辺滞在期間：7月14日(火)～7月30日(木))

3. 受入人数

ニューマン大学学生 6名 (2名：教育学専攻 4名：ビジネス専攻)

4. 学内での主な交流イベント (詳細は 5. 日程概略 を参照)

7月15日(水) Welcome Party 17:00~(場所：学内第二福利施設)

7月17日(金) International Café 17:00~(場所：教育未来館 3F 多目的ホール)

7月29日(水) Farewell Party 17:00~(場所：学内第二福利施設)

※Welcome Party 及び International Café は、国際交流センター主催

5. 日程概略

7月13日(月) 大阪・関西国際空港に到着(夕方)

7月14日(火) 大阪市内研修、愛知教育大学到着

7月15日(水) 豊橋商業高校への学校訪問 愛教大卒業生(現教員)、高校生との交流

Welcome Party 本学学生・教職員との交流

7月16日(木) 日本文化体験(華道、日本語など) 名古屋市内研修施設(名古屋城)訪問

7月17日(金) 日本文化体験(書道など)

全学レベルでの International Café 本学学生・教職員との交流(要事前予約)

7月18日(土)～7月20日(月) ホームステイを中心とした本学学生との交流

7月21日(火)～7月26日(日) 自由行動 大学周辺の下宿学生との交流活動

7月27日(月) 私立幼稚園訪問 就学前教育の視察及び幼稚園経営の実際を見学

本学授業参観・日本人学生との交流

(3限：国際文化コース MS 科目 4限：共通外国語 F 科目)

7月28日(火) 英語サポートセンターを利用している学生との、学生主体の交流活動

全学向けの講演会に参加 講演会での講師及び学生との交流

7月29日(水) トヨタ工場見学 本学学生も同行

Farewell Party 本学学生・教職員との交流

7月30日(木)～7月31日(金) 東京に向けて出発、東京都内滞在(都内1泊、成田周辺1泊)

8月1日(金) 東京・成田国際空港より帰国

英語サポートセンター主催交流会

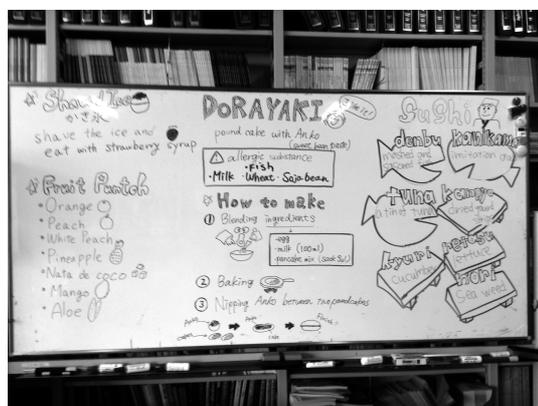
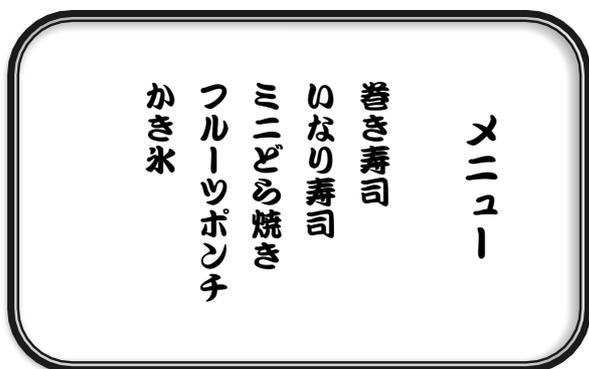
7月28日(火) 家庭科調理室&英語科共同研究室

英語サポートセンターのチューターが計画し、ニューマン大学学生
6人とサポートセンター利用者との交流イベントを行った。

イベント内容

料理を一緒に作って食べ、英語での異文化交流を行う。調理という作業を通して交流することで、話題も増え、積極的に英語で話すことができた。また、調理室の使い方の説明やエプロンの着用、レシピの説明など、日本独自のものを英語でどのように伝えるのか、英語表現の模索は非常に良い学習となった。

イベント当日、ニューマンの学生もエプロン姿を喜んでくれて、調理も食事も、非常に積極的に参加し多くの交流ができた。特に、巻き寿司作りは、酢飯の作り方や具材の巻き方など質問しながら、「good!!」と楽しそうに作って食べていた。和やかな雰囲気の中で、学生同士のフレンドリーな交流ができたことはとても有意義であった。



「オーストラリアでの教育実習プログラムについて」

1. これまでの海外派遣概要

開始 2012年

派遣実績 80名(2012～2015)

派遣校 クイーンズランド州、ビクトリア州の小中高等学校

滞在形式 ホームステイ

2. 2015年度実施内容

グループ① クイーンズランド州(バンダバーグ、ブリスベン、サンシャインコースト)

期間 8月22日～9月6日 2週間

引率者 アントニー・ロビンズ先生

参加学生 3年生 14名

グループ② ビクトリア州(メルボルン)

期間 8月29日～9月19日 3週間

引率者 アンソニー・ライアン先生

参加学生 2, 4年生 5名

参加人数 19名(初等中等英語科学生、国際文化コース学生)

実習内容 主に日本文化や風習を紹介する授業を行う。その他担当教員の指示のもと授業やアシスタントを行い、その他にも学校行事に関わるなど活動は学校によって様々。

渡航までの日程

4月 参加学生の募集、航空券の手配

5月中旬 参加学生面接

6月～8月 事前指導ミーティング(毎週水曜日13:00に実施)

渡航費用

学生一人当たり

グループ① 大学負担: 150,000円 個人負担: 65,000円 合計: 215,000円

グループ② 大学負担: 183,000円 個人負担: 85,000円 合計: 270,000円

引率者費用(2名分) 750,000円

大学負担総額(学生19名+引率教員2名) 約300万

3. 参加学生によるグループ発表

グループ① 長谷川 倫子 大林 佳奈 安藤 友紀 曾我 直崇

グループ② 余語 亜也子 川崎 朱玲 加藤 佑美 荒井 颯人

グループ③ 三浦 朋美 金児 美咲 竹内 久美子 矢田部 希

グループ④ 五井 美樹 竹中 由季

文部科学省 特別経費プロジェクト

「グローバル人材育成を主軸とした教員養成等プログラムの開発-海外教育実習、
体験型教育及び、英語コミュニケーション能力と指導力養成カリキュラムの構築-

講演会・海外教育実習報告会

日時：2015年1月21日（水）14:40～18:10

場所：愛知教育大学 教育未来館 3F 多目的室

主催：愛知教育大学外国語教育講座

参加費：無料(参加登録も必要ありません)

※愛知教育大学に車でお越しの際は、駐車場
などの案内を配布いたしますので、下記
問い合わせ先までご連絡ください。

英語サポートセンター aue.english@gmail.com

プログラム：14:40～受付（教育未来館 3F）

15:00～15:05 開会式

15:10～16:40 講演

演題：「大学に求められるグローバル人材の育成と新しい動き」

講師：小野博

（福岡大学客員教授 グローバル人材育成教育学会会長

日本リメディアル教育学会ファウンダー）

講師紹介：高橋美由紀（愛知教育大学）



16:45～18:05 海外での教育実習報告会

16:45～17:05 教育大学に適した海外教育実習のあり方

高橋美由紀（愛知教育大学）

オーストラリアでの教育実習プログラムの概要

Ryan Anthony（愛知教育大学）

17:05～18:05

海外教育実習の実際

17:50～18:05

質疑応答

1. Bundaberg

Tasting differences through our first teaching experience

「教育経験の出発点としての海外教育実習」

2. Brisbane & Melbourne

To be global teachers

「学修活動の帰結点としての海外教育実習」

18:05～18:10 閉会式

問い合わせ先：英語サポートセンター aue.english@gmail.com

ホームページ <http://www.aue-english.aichi-edu.ac.jp/index.html>

発表グループ①

Avoca State Primary School(小学校、公立)

(長谷川倫子)

学校の所在地 Bundaberg

派遣期間 8月22日～9月6日

現地での日本語教育体制 なし



Iona College (Year5 to Year 12 小～高)

(曾我 直崇)

学校の所在地 Brisbane

派遣期間 8月22日～9月6日

現地での日本語教育体制

- ・4技能にわたって充実している。

学校の特徴

- ・男子校であるため服装はスーツである。
- ・日本人の先生もおり、ジャパニーズオフィスも存在する。
- ・課題の提出や出欠席の確認もすべてiPadもしくはパソコン
- ・ほとんどすべての学生が簡単な日本語なら話せる。
- ・教室内は日本の伝統的なものや生徒の作品が飾ってある。



Bagara State School(小学校、公立)

(安藤友紀、大林佳奈)

学校の所在地 Bundaberg

派遣期間 8月22日～9月6日

現地での日本語教育の体制

- ・Year5/6でJapanese classがある。

学校の特徴

- ・日本語の授業専用の教室があった。
- ・生徒が「こんにちは。」や「いただきます。」と日本語で挨拶できる。

→Japanese classで学習したことを日常的に使うなど日本語に親しみを持っている。



Bundaberg West State School(小学校、公立)

(安藤友紀、大林佳奈)

学校の所在地 Bundaberg

派遣期間 8月22日～9月6日

現地での日本語教育の体制

- ・Year5/6でJapanese classがある。

学校の特徴

- ・教室に扉がない。(廊下との境がない。)
- ・机の配置や座る向きが意図的にばらばらだった。
- ・黒板と電子黒板の両方が教室にあった。
- ・校内で先生同士が会ったときに挨拶を必ずしていた。



発表グループ②

St Patrick's Catholic Primary School(小学校、私立) (加藤 佑美 荒井 颯人)

学校の所在地 Bundaberg

派遣期間 8月22日～9月6日

現地での日本語教育の体制 ・なし

学校の特徴

- ・毎日朝にお祈りがあり、金曜日には全校でお祈りをする集会がある。
- ・ICT教育が進んでいる。パソコンだけでなく、Year5, 6は児童全員がiPadを持っている。



St. Mary's Catholic Primary School(小学校) (余語 亜也子 川崎 朱玲)

学校の所在地 Bundaberg

派遣期間 8月22日～9月6日

学校の特徴

- ・日本語の授業はカリキュラムに全くない。
- ・毎週月曜日に表彰式がある。
- ・毎週金曜日に本をもとにした劇の発表会がある。
- ・電子黒板やPC、iPadを使って勉強する。
- ・クラス内で4～5つのグループに分かれて勉強する。



発表グループ③

Shalom College(高校) (三浦 朋美 竹内 久美子)

学校の所在地 Bundaberg

派遣期間 8月22日～9月6日

現地での日本語教育体制

- ・選択科目として日本語の授業がある。

学校の特徴

- ・中学1年生から高校3年生までの生徒が通う高校。
- ・この学校にはクラスはなく、生徒たちは自分で時間割を組んで、選択した教科を学んでいる。



Mountain Creek State High School (金見 美咲)

学校の所在地 Sunshine Coast

派遣期間 8月22日～9月6日

現地での日本語教育体制

- ・選択科目として日本語の授業がある

学校の特徴

- ・中学1年生から高校3年生までの生徒が通う高校。
- ・各自ノートパソコンを持っている。
- ・先生たちの仲がとても良い。職員室では自分の席に居ることはほとんどなく、フリースペースで様々な話をしている。



St Joseph's Catholic Primary School

(矢田部 希 角野 真悠)

学校の所在地 Bundaberg

派遣期間 8月22日～9月6日

現地での日本語教育体制 なし

学校の特徴

- ・キリスト教の私立学校
- ・生徒は制服を着用している。
- ・自主性を養うプログラムが多くあった。



グループ④

St Peter's Primary School ,Bentleigh East (五井美樹 森陽子)

学校の所在地 Melbourne
派遣期間 8月29日～9月19日



St Joan of Arc School (竹中 由季)

学校の所在地Melbourne
派遣期間8月29日～9月19日



Sacred Heart Parish School, Sandringham (徳田美奈)

学校の所在地 Melbourne
派遣期間 8月29日～9月19日



St Joseph's Primary School, Black Rock (関口明日香)

学校の所在地 Melbourne
派遣期間8月29日～9月19日

大学に求められる グローバル人材の育成と新しい動き

15.01.21 愛知教育大学
小野 博
(福岡大学・昭和大学)

自己紹介

- ▶ 小野 博
- ▶ 福岡大学・昭和大学 客員教授
- ▶ グローバル人材育成教育学会 会長
- ▶ 日本リメディアル教育学会 ファウンダー
- ▶ 書育推進協議会 会長
- ▶ 慶応義塾大学工学部修士課程修了
- ▶ 工学博士・医学博士
- ▶ 慶応義塾大学医学部助手、東京学芸大学助教授の後、大学入試センター教授、メディア教育開発センター教授、放送大学客員教授等を経て現職
- ▶ 専門はコミュニケーション科学

今後の世界における日本の立ち位置

- ▶ 日本を取り巻く経済環境の急激なグローバル化
- ▶ 日本の人口減少の加速化
東京オリンピックの開かれる2020年頃から毎年60万人(鳥取県)~100万人(北九州市と同等)の人口が減少
- ▶ 毎年、1万人のビジネスマンが新規海外へ
(15.01.06日経新聞)
- ▶ 企業は工場の海外移転(国内消費)から、市場そのものを求めた海外展開へ⇒ハードからソフトへ
上海の日帰り温泉、チベットの検診車、ベトナムの野菜生産
インドネシアのたこやき屋、コンビニでのおにぎりブームとラウンジ

国内の人口減少への対応策

- ▶ 観光立国をめざし、観光ビザや免税制度の緩和や円安の進行で大量の観光客・ビジネス客が来日へ
- ▶ 国内の就活でも英語力が求められる時代へ
- ▶ 大学には社会からグローバル人材(コミュニケーション能力・異文化対応力・英語力を身につけた人材)の輩出が求められる
- ▶ グローバルリーダーだけではなく、大量のグローバル人材の育成が求められる

日本の大学の課題

- 18歳人口の減少・入試の多様化⇒入試改革
大学の2018年問題
大学生の基礎学力、特に日本語・英語力が低下
初年次・リメディアル教育を導入する大学が増加
リメディアル教育の成果は限定的
- ▶ 教育政策で英語教育の開始年齢が低年齢化へ
大学新入生の英語力は低下⇒平均は英検3級レベル
日本の言語環境の中で最適かつ効率的な英語学習法を理解する英語教育関係者が少ないのが致命的
 - ▶ グローバル人材の育成が大学の最重要課題に

各大学の担当者の悩みを聞くと

- ▶ 大学内の一般教員の協力が得にくい
- ▶ 世間、大学で学生の海外活動を評価してくれる人が少ない
- ▶ 何をすれば、大学教員や世間が協力的になるか？
教員や世間が驚く学生の成長や変化を示す
事前準備学習と現地の活動で実践的英語力の向上を(帰国後の報告会で30分の英語による報告)
⇒全学生の数値目標を定め、確実に英語力を上げる
- ▶ それは、どこの大学でもできるか？
実証した大学が出始めた！
学生のインターンシップの経験が大学を変える

大学に求められるグローバル人材の育成

- ▶ 特別な存在から全ての学生にとって自分の問題に「英語で学ぶ国際学部」を新設する時代ではないましてや「英語学科」の学生だけを対象する大学は論外
少数のグローバルリーダーと日本を代表して仕事を
をする大量のグローバル人材を社会が求めている
- ▶ 通訳を求めているのではない
- ▶ 人材の資質・英語力の向上は教育で可能に
コミュニケーション能力を高め、異文化対応力を身に
付け、必要に応じた英語力を使いこなす教育が軌道に

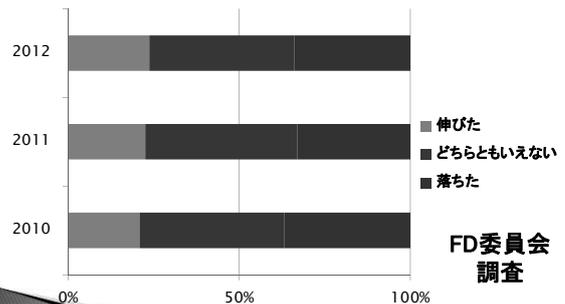
全員に留学を課す大学・学部が増加

▶ 全員留学 (予定)	国際教養大学 一橋大学 立教大学 (予定)	全学生(180人) 約1000人の新入生(2018年度以降) 約4500人の新入生(2024年度を目指す) 約35000人(2032年)
▶ 学部単位	千葉商科大学 立教大学 法政大学 創価大学 同志社女子大 関西学院大学 関西大学 同志社大	国際教養部(75人) 異文化コミュニケーション学部(115人) グローバル教養学部(100人) 国際教養部(80人) 学芸学部 国際教養学科(80人) 国際学部(300人) 外国語学部(165人) グローバルコミュニケーション学部(新設150人)
自前キャンパス	昭和女子大 武庫川女子大	人間文化学部 英語コミュニケーション学科(160人) 文学部 英語文化学科(200人)

大学の教養英語は

英語力の向上に役立っているか？
グローバル人材の育成に役立っているか？
専門課程の教員の意見は？ 学生は？
改革は始まっているか？ +αの英語教育とは

ある国立大学の教養英語の成果調査 学生調査：英語の読み・書き・話し・聞く力は伸びたか？ (2年生1300人～1500の回答)



教養科目の英語教育の改革は進むのか？

- ▶ 教養科目としての英語教育では、約80%の学生が英語力が上がっていないと回答
- ▶ 日本の言語環境の中で、確実な成果を出すための英語教育の研究が足りない
- ▶ 慶応SFC・Berlitzに教養英語の派遣講師を依頼 成果が出ず中止へ
- ▶ 教養英語+αの英語教育に関心が集まる
- ▶ 毎日学習の短期集中型英語教育に注目!

従来から

国際化が評価されている大学では

- ▶ 大学の国際化・グローバル人材の育成に強いと言われている大学
- ▶ 実際は、帰国子女や進学校、附属高校から英語力が高い学生を積極的に集め
⇒世界の有力協定校へ留学
大学全体の活動が活発のように見えるが、ほんの一部
- ▶ 教養英語では分厚い中間層の学生の英語力は上がらず、自費(エクステンションなど)で学習へ
- ▶ これからは、教養英語+αの英語学習を大学負担で
- ▶ 現在の研究主体から教育重視へ、留学生/院生対象から学部学生主体へ、全在籍者に対するグローバル人材の比率を高める努力を

最近の学生は内向き志向か？

- ▶ 最近の学生はコミュニケーション能力が低く、内向き志向と言われている
- ▶ 学生は内向き志向ではない(英語力と渡航費)
- ▶ 大学負担で英語力が上がり、アルバイト費用+α程度(大学の補助等を期待)の費用で外国へ行けるなら、ぜひ行きたい
- ▶ 近い将来、海外研修に出かけることを前提に、大学の費用で英語力を上げるプログラムが始まった
- ▶ 同時に、コミュニケーション能力・異文化対応力を高めるプログラムも開発
- ▶ 最も重要なことは、最初から継続可能な計画を

夢に向かった新しい取り組みが始まっている リメディアルからグローバルへ

- ▶ 同世代の海外の学生との共同作業を伴う専門性を生かした交流を大学が企画し、徹底した準備学習と一人一人が現地で体験した内容を帰国後、発表する機会を増やす
- ▶ 専門課程の教員を巻き込み、英語教員と共に専門課程の教員が汗をかけば、学生はついてくる
- ▶ 目の前に目標があり、将来役立つことを理解し、「専門科目・基礎科目・英語」の勉強に熱中する学習モデルは成功する⇒今、何を勉強すべきか気付く
- ▶ 学習成果の実感、現地での楽しい共同作業、プレゼンなどは自信と学習意欲の高揚に直結
- ▶ 英語力が上がると、学内・世間の評価が高まる

実例を紹介

多くの大学で始まった グローバル人材育成への新しい動き

- ▶ ITの共同制作・コンテストの相互訪問
- ▶ 学生を国際見本市の通訳に
- ▶ リーダーの意思で大学・学部改造
- ▶ 目標の設定が予期しない効果に
- ▶ 短期集中型方式の教育でコミュニケーション能力・異文化対応力・英語力の向上に思わぬ成果が

実例1 北海道情報大学 ITワークショップ形式の学生交流

タイの理系大学を相互訪問し、Webデザイン・Short Film・コンピュータプログラミングの制作に毎日5時間の共同作業を実施
渡航前の事前準備学習の充実

- 目標
- ①ICTリテラシーの向上
 - ②グローバルコミュニケーション力の向上
 - ③相互の文化を深く理解
 - ④学生相互の友情を育む

事例2 北海学園大学経営学部 シンガポール商談会への学生通訳派遣

- ▶ アジア最大の食品見本市(50ヶ国、3000社、6万人参加)に北海道の中小企業5社が出展
- ▶ 通訳サポートを大学に依頼
- ▶ 経営学部3年5名、2年2名が自費で自主参加
- ▶ 留学経験2名、3W渡航歴2名、海外経験なし3名、内2名は英語力初級レベル
- ▶ 徹底した事前準備学習、事後学習が大きな成果
- ▶ 海外経験なし・初級レベルの学生が大活躍

海外派遣準備学習とその成果

- ▶ 事前準備学習
貿易基礎知識、中華系ビジネスの考え方、ビジネスの基本英語から、商品のビジネス計画、商品の特徴、バイヤーの想定質問の調査実施。英訳と1分での説明模擬商談会の実施、シンガポール英語をネットで学習
- ▶ 現地で好評
英語力が低い学生が大活躍・グローバル人材
- ▶ 帰国後
引き合いメールに対応、数千万円の商談成立
- ▶ 札幌市が支援
夏休みに香港、その後、サンフランシスコへと続く

実例3 明治大学政治経済学部 留学前基礎英語力強化策の成果

- ▶ 収容定員4000人 志願したい大学1位「国際化」へ！
留学期間者 TOEIC600以上 協定校
2008年 50名 275名 1校
2013年 162名 1014名 41大学
(800点以上が152名)
- ▶ 米大学生の1ヶ月のステイター-の学生交流から始まった
12回の英語による授業、国会、都庁、日銀等の訪問
「学生サポーター」50人 山中湖で3日ジョイントディスカッション
相互訪問 「学生サポーター」はその後、全員留学へ
留学前基礎英語力強化 課外英語ACE受講1000名
TOEIC, TOEFL, IELTS等のテスト費用の大学負担
グローバル化戦略 教職員が本気⇒大学が変わる

実例4 東京海洋大学 英語力の上昇で学内・世間の見方が変わる

- ▶ 文科省のグローバル人材育成事業に採択される
- ▶ 学内の関心が低く、学内から担当教員現れず
- ▶ 外部から元商社員を任期付特任教授で採用
- ▶ 現地の日本社会を味方に、地元の学生とペアで活動する海外インターンシップを実施
- ▶ 研修中に英語による日記作成 現地で報告会
- ▶ 帰国後、大学主催で英語による報告会 「あの学生は、本当にうちの学生か？」と称賛
- ▶ 学長は「わが大学の売りに！」と
- ▶ 反対の中、英語力を進学・入試の基準へ

グローバル人材を目指した英語・日本語学習法

- ▶ グループ1⇒グローバルリーダー
入学時に日本語力 高校生レベル以上、英検 2級以上
TOEFL, IELTSの学習で留学を目指す
- ▶ グループ2(分厚い中間層)⇒グローバル人材
日本語力高校生レベル以上、英検準2級レベル
海外英語研修、海外インターンシップ等でグローバル人材を目指す
- ▶ グループ3(予備軍)⇒リメディアルからグローバルへ
日本語力中学生レベル、英検3級以下
英語の前にやることがある 読書(50冊)、新聞購読など
基礎基本英語の学習などで英検準2級を目指す

実例5 必ず成果が出る英語教育 福岡大学の短期集中英語学習

- ▶ 目標 近い将来、海外に行くための準備学習として英語が不得意(リメディアル教育が必要な学生も含む)で嫌いな学生でも、好ましい学習者へ
- ▶ 手法 学習意欲を引き出す工夫・仕掛け
コミュニケーション能力育成ワークショップ・異文化対応力育成講座の実施など、多彩なプログラムで学生の英語学習への学習意欲を高揚させ持続へ
学生が「聞く・話す」英語力の向上を実感し、テスト結果の数値の上昇で自信を持ち英語が好きに

学生募集に使用したポスター図案(2)

この大学では唯一
ワタシには
やり残したコトがある。
と書いて「2」アタリ
将来の可能性をノックしましょう。

多岐
多岐
多岐

福大生でいる間
2ヶ月だけ
グローバル
もまれて
みないか?

短期集中型英語教育の内容

- ▶ 期間 7週間
月～金 3時間
土 コミュニケーション能力育成ワーク
ショップや異文化対応力育成講座を実施
- ▶ 学習時間 目標は対面授業50時間、e-learning50時間
- ▶ Interactive English
英語によるドラマメソッド
TOEIC講座の実施
英語によるグループディスカッションやプレゼンテーションの準備と実施
- ▶ 今の学生に合ったe-learning 教材を採用

コミュニケーション能力育成ワークショップ

- ▶ 現役の役者の指導 2日間 役者の養成所の学習プログラムの一部を学生に実施 役者の評価の上昇と客観的な学生のコミュニケーション能力の向上を確認



異文化対応力育成講座

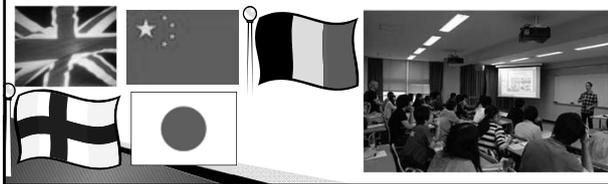
- ▶ 日本人学生6~7人に1人の留学生 全員が会話の機会 英語による会話に興味・関心を持つきっかけに
- ▶ プレゼンテーションの準備としてのグループディスカッション ⇒ 全員が発表することにより自信と学習意欲の高揚



Interactive English

- ▶ 日本人英語教員(時には留学生教員)+TAによるインタラクティブ重視の新しい英語の授業

- ① 5限: 学習教材はアカデミック英語 (EAP)(心理・化学・物理・法律・言語など)
- ② 6限: Interactive English (明快かつ論理的な構造に富む会話、スピーチ、ディスカッションの訓練)



e-learningの基本・TOEICテスト対応の学習教材 Newton e-Learning Cコース

- ・誤答問題の自動反復で弱点克服
- ・良質な問題 管理機能が充実
- ・付属のTOEICハーフテストが無料
- ・スマートフォン対応でモバイル学習も



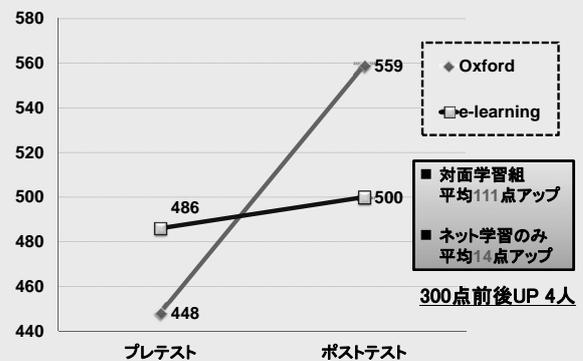
Part5 短文穴め埋め問題

EnglishCentral 学生が飽きないe-learning会話教材が好評



- ・「英語を学ぶ」ではなく、動画(1万以上)利用で「英語を使って学ぶ」楽しさを
- ・「話す」と「すぐにフィードバックが返る」発音評価がゲーミフィケーション

TOEICスコア比較



Oxford大学における短期英語研修

- ▶ ごく普通の海外英語研修
教員の授業の進め方、事前学習に特徴
- ▶ 期間は2週間 寄宿舎に宿泊 個室
- ▶ 授業は毎日6時間(9:30~13:30, 14:30~16:30)
- ▶ 宿題もあり
- ▶ 会話力で2クラスに分けて別プログラム
- ▶ 教員は1クラス3名
- ▶ 朝食・夕食は寄宿舎 土・日は課外研修
- ▶ 夜はカフェ・パブ等で英国の学生生活を体験



まとめ1 英語学習 英語学習法は目的・目標によって異なる

- (1) グローバルリーダーを目指す
 - ▶ 大学入学時に英検2級以上⇒高校生への英語教育支援を
 - ▶ 大学ではTOEFL学習などのアカデミック英語の学習を
 - ▶ 協定校への1年以上の留学・英語による授業の受講
- (2) グローバル人材を目指す
 - ▶ 分厚い中間層の学生全体が対象
 - ▶ 教養英語ではなく、TOEIC英語や実践的英語学習が重要
 - ▶ 海外渡航前の目的を持った短期集中型英語教育が効果的
 - ▶ 短期留学・海外英語研修・インターンシップなどの経験や国際交流の機会を積極的に増やす
 - ▶ 就活で海外志向・英語を使う仕事を目指す

まとめ2 国際教養大学の躍進がきっかけで グローバル人材の育成教育に変化が

- ▶ 国際教養大はまだ創立10年です
- ▶ 明治大学のプログラムのスタートは6年前です
- ▶ 東京海洋大学の事業は始まって3年です
(アナウンスだけで新入生のTOEICも上がる)
- ▶ グローバル人材の育成策で大きな成果を出している大学の教職員は、大きな志と戦略を持ち、アイデアを生み出し、たゆまぬ努力を積み重ねている
- ▶ 教職員の意識改革でどの大学にもチャンスはある
- ▶ 小規模・小予算からでも始められる
- ▶ 研究に比べ、短期間で成果が出やすい事業である

海外教育実習報告会

2015年1月21日(水) 17:05~18:05

@愛知教育大学 教育未来館 多目的ホール

1. 海外教育実習の概要 (長峯 貴幸, 教員養成課程 英語専攻 5年生)

1.1 これまでの海外教育実習

開始: 2012年

派遣実績: 59名

派遣校: クイーンズランド州, ビクトリア州の公立小中学校

滞在形式: ホームステイ

1.2 派遣までの流れ(2014年第1グループの例)

(5月下旬) ライアン准教授, ロビンス教授による応募者面接

(6月7月) オリエンテーション (現地の教育事情, 生徒指導上の留意点等: 教員主導)

英語プレゼンテーション練習 (3回: 学生主導)

(8月上旬) 現地に向けて出発

2. ATP2014 参加学生によるグループ発表

A

➤ 教員養成課程 英語選修/英語専攻

2年生 有本明日翔 近藤朱羽也

3年生 内田絢乃 野村朋香 菱沼花梨

4年生 池ヶ谷海里 加藤玲奈 島林祥太 高橋沙友理 深谷友貴

5年生 松永りか 水野真衣

➤ 現代学芸課程 国際文化コース

3年生 伊藤綾乃 中野まよ 藤本美優

4年生 辻本慎吾

5年生 富永寛

海外教育実習についての最新情報⇒ <http://tony.gaikoku.aichi-edu.ac.jp/ATP/>

発表ブースA

St. Joseph's Catholic Primary School, Bundaberg (小学校)

(内田 絢乃, 有本 明日翔)

派遣期間：8月2日～8月24日

日本語教育：カリキュラムに全くない

- ・子供と先生との距離が近い
- ・iPad やパソコンなどを取り入れた授業
- ・親が協力的
- ・机の配置が独特で、生徒や授業スタイルに合わせている
- ・学年を超えて交流する buddy 制度
- ・生徒の発言を大切に、生徒が積極的、自己主張激しい
- ・苦手な科目を個別にサポートする Learning Support Room がある



St. Joan of Arc School, Brighton (小学校)

(高橋 沙友理)

派遣期間：8月31日～9月22日

日本語教育：授業がある

- ・日本の文化事情を通して、日本のことを学んでいる。
- ・日本語の勉強より、日本のことを知ろうというスタイル。
- ・日本の授業以外では、全校コミュニケーションなどあり、全学年のかかわりが強く、子ども主体の活動が多い。
- ・iPad や電子黒板の設備も整っている



Stella Maris Catholic Primary School, Beaumaris (Melbourne) (小学校)

(深谷 友貴)

派遣期間：9月1日～9月19日

日本語教育：全学年において授業がある

カトリック関連の授業、パソコンを使った授業が多い



発表ブースB

St. Mary's Catholic Primary School, Bundaberg (小学校)

(野村朋香, 菱沼花梨)

派遣期間：8月2日～8月24日

日本語教育：カリキュラムに全くない

- ・日本のような時間割りはありません。
- ・体育や音楽などの特別な講師の方が担当する授業は時間が決まっていますが、それ以外は担任の先生に任されています。
- ・学校全体として、本から学ぶことを大切にしています。1日に2～3回は読み聞かせや黙読の時間が設けられます。
- ・本の主人公になりきりきった仮装大会や、学校で親と本を読む機会が多く、掲示物も本から取り出したものが多いです。
- ・授業や掲示物で、ポジティブでいることの大切さを子どもたちに伝えています。
- ・毎日の学校終わりや週に1回の朝礼で、スポーツから授業態度まで様々なことにおいてより多くの児童を表彰します。

Mountain Creek State High School, Sunshine Coast (高校)

(加藤玲奈)

派遣期間：8月22日～9月14日

日本語教育：選択制の日本語の授業がある

・Grade8,9 10IB,11,11IBの学年に日本語の授業がある。

- ・IBクラスはレベルが高い
- ・教室内にはたくさんさんの日本の物であふれていた。



St. Joseph's Primary School, Black Rock (Melbourne) (小学校)

(水野真衣)

派遣期間：8月30日～9月22日

日本語教育：カリキュラムに全くない（日本語の授業はなく、週1回インドネシア語の授業がある。）

比較的小さい学校で、例えば、year5とyear6の子どもと一緒に授業を受けるように、prep以外、2学年の子どもたちが1クラスで混じって一緒に授業を受ける。

授業は基本的に少人数制で、子どもたちは、自分は今何の授業をどこで受けるかを考えて、授業ごとによって個々に場所を移動する。

- ・1つの授業でも場所ごとで勉強する内容も異なる。
- ・それぞれの場所の内容に一区切りがつくと、子どもたちは一斉に別の場所に移り、別の内容の授業を受けたり、別の作業をしたりする。
- ・1年で子どもたちが全ての場所をまわられるようなカリキュラムになっている。
- ・先生は基本的に授業をするときはICTを使い、子どもたちも一人ひとずつiPadをもっている。
- ・教室は、開放的な作りになっていて、教室間の扉は開閉自由になっているが、ほとんど扉は開いた状態になっている。



発表ブースC

Avoca State Primary School, Bundaberg (小学校)

(中野まよ, 近藤朱羽也)

派遣期間：8月2日～8月24日

日本語教育：カリキュラムに全くない

- ・日本に興味のある生徒が多かった
- ・学校と保護者とのつながりが深かった
- ・多くの生徒が親の送迎で登校
- ・教師と保護者がメールや手紙での情報交換
- ・保護者がボランティアとして授業のサポート



St. Thomas More Primary School, Sunshine Beach (小学校)

(島林祥太)

派遣期間：8月25日～9月12日

日本語教育：カリキュラムに全くない

iPadを使った授業が多い



St. Kevin's Junior College (小学校)

(富永寛)

派遣期間：8月30日～9月21日

日本語教育：日本語のカリキュラムがあり、日本語担当の教員(オーストラリア人)が担当。

日本語授業は週一回で、prep.からYear 6まで全ての学年で行われていた。

Senior Collegeに進学すると、日本語以外の言語選択もできるが、私の行った junior college では、

全生徒が日本語を必修科目として履修していた。しかし、来年より日本語の言語はカリキュラムからなくなる。

男子校の私立学校。year 5 と year 6 は、毎週水曜日の午後にスポーツを行っていた。

これは、単なる体育の授業と違い、他の学校との交流試合をおこなっており、スポーツが盛んな学校と感じた。

発表ブースD

Shalom College, Bundaberg (中学2年生～高校3年生)

(伊藤綾乃)

派遣期間：8月2日～8月24日

日本語教育：選択の授業として日本語の授業がある生徒の主体性を重視しており、かなり自由度の高い学校であった。



St. Patrick's Catholic Primary School, Bundaberg (小学校)

(藤本美優)

派遣期間：8月2日～8月24日

日本語教育：カリキュラムに全くない

- ・Year 1に、日本語教師を親にもつ子どもが2人!
- ・学校に教会があって、月に1度教会へ行く。(低学年)
- ・毎週1クラス1人ずつ表彰される。(1週間で最も頑張った子! 学校便りに名前と写真となにを頑張ったかが掲載される。)
- ・教師同士の仲が良い! (それぞれの家族と共にご飯へ行ったり、海へ行ったり...)



Sacred Heart Parish School, Sandringham (Melbourne) (小学校)

(池ヶ谷海里)

派遣期間：9月1日～9月19日

日本語教育：日本語の授業がある

- ・日本語の授業が週一回あり、ひらがな、日本の文化などについて学んでいる。
- ・年に一度ジャパニーズデイというものがあり、寿司を作る、漫画を描くなどの様々なイベントが企画される。
- ・児童と教師はその日のみ日本に関連した衣装を身につける。



St. Peter's Primary School, East Bentleigh (Melbourne) (小学校)

(松永りか、辻本慎吾)

派遣期間：9月1日～9月19日

日本語教育：カリキュラムに全くない

8:45～9:00	お祈りの時間	11:40～12:40	授業③	Prep ～ Grade 6 (全校生徒約700人, 1学年4クラス)
9:00～10:00	授業①	12:40～13:40	授業④	授業内容：Reading, Writing, Maths, Religion, Sport, Inquiry, Specialists
10:00～11:00	授業②	13:40～14:30	昼食	宗教：カトリック
11:00～11:40	休憩	14:30～15:20	授業⑤	

オーストラリア教育実習アンケート報告

高橋美由紀・Anthony Ryan・稲垣真由美・山田美樹
(愛知教育大学)

概要

本稿の目的は、「オーストラリアでの教育実習プログラム」に参加した学生に対して、実習後に実施されたアンケート結果を報告することである。学生たちが「オーストラリアでの教育実習プログラム」に参加し、英語での教育実践やオーストラリアの教育活動体験の中で感じ得たものを、アンケートより抜粋して紹介する。

キーワード：海外教育実習・学生派遣・教員養成

1. はじめに

オーストラリアでの教育実習は2012年度より始まり、実習後のアンケートも初年度より実施されたが、2012年度は設問項目も少なく、アンケートの有効回答数も少なかったため、2013年度に実施されたアンケートから、2014年度、2015年度と3年分のアンケート結果を報告する。

アンケート用紙(資料1)は、オーストラリア教育実習後、参加学生たちにメールなどで回答を求め、帰国後3ヶ月以内に回答を得ている。各年度のオーストラリア教育実習実施概要は以下の通りである(表1)。

表1：オーストラリア教育実習実施概要

実施年度	参加学生人数	実習期間	個人費用負担	
2013年度	17名	3週間	なし(全額プロジェクト負担)	
2014年度	20名	3週間	7万円	
2015年度	19名	14名	2週間	6万5千円
		5名	3週間	8万5千円

文部科学省「特別経費プロジェクト」事業名

2013年度「小学校外国語活動を前提とした小・中・高での英語関連科目の連携を進める
英語教員養成カリキュラムの開発と授業実践力を高めるための教育改革」

2014・2015年度「グローバル人材育成を主軸とした教員養成等プログラムの開発
ー海外教育実習、グローバル教育、フィールドワーク等の体験型教育
及び、英語コミュニケーション能力と指導力養成カリキュラムの構築ー」

2. アンケート結果報告

アンケート（資料1）は5段階の自己満足度で回答し、その理由を記述する方式である。2013年度から2015年度の参加者全員56名からアンケート回答を得ることができ、その結果を（表2）にまとめる。

表2：アンケート結果

「I. オーストラリアでの教育実習について、番号を記入して下さい。」	
5：強く思う　4：思う　3：ふつう　2：思わない　1：強く思わない	

		評価	派遣年度			合計	56名に対する割合
			2013年	2014年	2015年		
1	海外での教育実習に参加して良かったと思う。	5	17	20	19	56	100%
		4	0	0	0	0	0%
		3	0	0	0	0	0%
		2	0	0	0	0	0%
		1	0	0	0	0	0%
2	参加したことで、自身の英語コミュニケーション能力が向上したと思う。	5	9	4	5	18	32%
		4	5	13	11	29	52%
		3	2	3	2	7	13%
		2	1	0	1	2	4%
		1	0	0	0	0	0%
3	参加したことで、英語を人前で話すことに自信がついたと思う。	5	9	6	5	20	36%
		4	5	11	9	25	45%
		3	3	3	5	11	20%
		2	0	0	0	0	0%
		1	0	0	0	0	0%
4	参加したことで、英語で生徒や児童に指導することに自信がついたと思う。	5	5	2	4	11	20%
		4	8	15	7	30	54%
		3	2	3	7	12	21%
		2	2	0	0	2	4%
		1	0	0	1	1	2%

5	参加したことで、自身の授業実践指導力が向上したと思う。	5	4	8	1	13	23%
		4	9	9	11	29	52%
		3	3	3	6	12	21%
		2	1	0	1	2	4%
		1	0	0	0	0	0%
6	参加したことで、今後日本の英語の授業に役立てることができると思う。	5	10	14	9	33	59%
		4	4	4	8	16	29%
		3	3	2	2	7	13%
		2	0	0	0	0	0%
		1	0	0	0	0	0%
7	参加したことで、日本の言語・文化についても詳しく勉強したいと思う。	5	11	16	11	38	68%
		4	5	1	3	9	16%
		3	1	2	3	6	11%
		2	0	1	0	1	2%
		1	0	0	2	2	4%
8	参加したことで、グローバルな視点から、児童・生徒を指導することができると思う。	5	10	9	6	25	45%
		4	5	8	7	20	36%
		3	2	2	6	10	18%
		2	0	1	0	1	2%
		1	0	0	0	0	0%
9	参加したことで、より一層、英語の学習をしたいと思う。	5	17	19	17	53	95%
		4	0	1	2	3	5%
		3	0	0	0	0	0%
		2	0	0	0	0	0%
		1	0	0	0	0	0%
10	教師になった時に、この海外教育実習のことを児童や生徒に体験を話したいと思う。	5	16	18	19	53	95%
		4	0	0	0	0	0%
		3	1	2	0	3	5%
		2	0	0	0	0	0%
		1	0	0	0	0	0%

3. アンケート結果の詳細

3.1 「問1：海外での教育実習に参加して良かったと思う。」

3年間で参加したすべての学生が5評価をつけている。2014年度・2015年度は自己負担金が追加されたにもかかわらず、参加者全員がオーストラリアでの教育実習体験を有意義に捉えている。自分にとって非常に貴重な体験となり、今後の生き方・考え方に影響を及ぼすような有意義な経験ができたことに感謝の意を示す学生が多かった。グローバル人材育成を目的として行われている本プロジェクトとしては、目標に向かって確実に進んでいると確信できた。

《学生の声》

評価	学年	評価の理由
5	3年女子	オーストラリアだけでなく日本の文化についても新たな知識をつけることができる。英語に対する向上心が高まる。今の自分にできること、足りないものが分かって、自分自身が変われる。いろんな人とコンタクトをとることができる。オーストラリアの教育事情を知ることができる。
5	4年女子	貴重な体験だし、オーストラリアと日本の教育の違いを学ぶことができたから。またオーストラリアの学校から、自分が将来教師になったときに取り入れてみたい活動を見つけたり、逆に日本の教育の良さ・改善点について考えたりすることができたから。
5	3年男子	自分で生徒のために何が出来るかを英語に囲まれた環境で経験できたことが、自分の自信、同時に弱みをあぶりだす為に最適であったから。
5	2年男子	オーストラリアと日本の教育の違いを感じる事ができたし、このプログラムを通して得た経験は間違いなく生涯僕を支え続けられると思う。

3.2 「問2：参加したことで、自身の英語コミュニケーション能力が向上したと思う。」

評価4が65名中29名と最も多く、評価5：18名、評価3：7名が続く。2,3週間と期間が短いため、英語を聞く力や話す力が飛躍的に伸びたという実感は薄いですが、英語圏であるオーストラリアにおいて、英語でコミュニケーションすることができ、オーストラリアの子ども達に英語で授業ができたことは大きな自信につながったようである。また、学んできたものが実践できた喜びと自分の英語力やコミュニケーション能力の足りない点を見つめる機会にもなったと言える。

《学生の声》

評価	学年	評価の理由
5	4年男子	伝わりにくいことでも、伝えようとする気持ちがあればなんとか伝えることができた。相手が理解していないと思ったら、ジェスチャー、紙に書くことや違う言い方で表現することが大切だと思う。コミュニケーション能力は言語能力より伝える意欲が一番大切だと感じた。
4	3年女子	3週間、実習先の学校でもホームステイ先でも、英語に囲まれて生活することができた。誰にも頼らず、英語を聞き話さなければならぬという環境のおかげで、英語を積極的に使うことができた。
4	3年女子	英語を話して相手に伝えようとしたし、伝わらないと発音などを注意するようになっていたから。
3	4年女子	英語の能力はまだまだだが、もっと頑張りたいと思う良い機会になったため。

3.3 「問3：参加したことで、英語を人前で話すことに自信がついたと思う。」

自己評価は問2と同じような傾向が出た。英語力や文法、英語の表現などは、知識不足な点も多いが、伝えたい相手がいれば、伝える気持ちがあれば、自分の英語でも話すことができたという体験が自信につながっている。英語圏の教育現場に立ち、人前で英語を話す恥ずかしさや躊躇する気持ちより、伝えたいと思う気持ちが勝った結果であろう。

《学生の声》

評価	学年	評価の理由
5	2年男子	以前までは文法をかなり気にしていたが、それよりも伝えようとするのが大事であり、気にしすぎるものではないと感じたので間違いをしても問題ではないと感じたから。
4	4年女子	最終日に職員室でスピーチを自分からしたいと思うことができたし、ホテルや鉄道でも自ら尋ねたいと思ったから
4	4年男子	自分の授業ではもちろん、子どもたちとの英語でのコミュニケーションを3週間続けたため。
3	3年女子	以前は英語を話すことに関わりコンプレックスを感じていたが、「上手く話せなくてもまずは声に出してみよう」という考え方が強くなった。

3.4 「問4：参加したことで、英語で生徒や児童に指導することに自信がついたと思う。」
 自己評価が4を中心として、若干ではあるが下位群へ下がっている。4年生以外は、初めての教育実習体験であり、英語でというだけでなく、生徒や児童に指導すること自体が難しい体験であったようだ。しかしながら、どの学生も多くの授業体験をさせてもらうことができ、見て学び、自ら英語での授業実践が出来たことは大きな自信へとつながっている。

《学生の声》

評価	学年	評価の理由
5	3年女子	たくさんのクラスルームイングリッシュを聞くことができたから。また、教育実習でも生かすことができた。
4	3年女子	初めて学校にいて、先生と生徒の関わり方を観察して生徒との関係の作り方を学んだから。
4	4年男子	15回の授業をさせていただいて、自信がついた。しっかりと準備をして、授業を行えば、生徒もそれに答えてくれると学んだ。
3	4年女子	たくさん授業ができたので少しは自信がついたが、指示など教室英語を正しく使えていないことが多かったので、指導する立場として、そこは正しい英語でできるようにしないといけないなど感じた。

3.5 「問5：参加したことで、自身の授業実践指導力が向上したと思う。」

問4と同じ傾向がみられる。オーストラリアの授業をたくさん経験する中で、日本とはまた違うオーストラリアの教育の良さに気づき、授業で使われる英語の指示語や授業の組み立てを学び、今後の活動に生かしていきたいという姿勢が多く見られた。

《学生の声》

評価	学年	評価の理由
4	4年男子	文化に対する知識が増えたりして、日本での英語教育の際に活かせるものを得ることができたと思う。指導力という点では、子どもが答えた後の声かけや、いかにわかりやすく指示をするか、どのように子どもを惹きつけるかといったことを学んだ。
3	3年女子	どのように授業構成・説明の順序を組み立てれば、混乱することなくなおかつわかりやすくスムーズな授業を行うことができるかを学べたような気がする。しかし、今回は教師というより、どちらかというゲストの扱いを受けていたため、現地の先生に大いに助けられた部分もあるので、自身の指導力は、多少は向上したと思うが、しっかり向上したとは言えないと考えたため。

3.6 「問6：参加したことで、今後、日本の英語の授業に役立てることができると思う。」
問4、問5に比べて、評価5が多く、全体的に上位の評価が多くなっている。授業実践力や英語で授業を行うことへの自信が持てたとまでは言い切れないが、オーストラリアでの教育実践体験を次へと活かしたいと思う気持ちが強く見て取れる。今回の体験が、学生達の今後の教員活動への大きな糧となって行くことは、本プロジェクトの本質的な目的であり、このアンケート結果は我々にとっても有意義な結果だと言える。

《学生の声》

評価	学年	評価の理由
5	4年男子	オーストラリアの文化、学校や子どもたちの違いなど、とても興味深いことをたくさん見たり聞いたりして知ることができたので、日本で英語の教師をするにあたってそういう子どもたちを惹きつけるような話をしたりして子どもに興味や関心を持たせながら授業を行えると思う。
5	2年男子	ネイティブがどのようにして英語を習得していくか、という過程を観察することができた。それをもとにどう日本の英語教育に活かすことができるかを考えていきたい。
5	4年男子	参加したことで、自分自身の考えが豊かになったと思う。授業で体験したことを話して、より実体験に基づいた話ができる。文化の説明をするときに、私の経験を話しながら説明をしていきたい
5	3年女子	授業中に行われているミニゲームは日本の中学生や高校生が楽しく学べるものだと思うので実際に使ってみてみたいと思った。
4	4年女子	授業の流れや生徒の興味・関心に関連させた授業を考え、実践した経験は指導力向上につながると思うが、語学をしっかり教えていくという授業は行わなかったため、そういう点についてはまだ自信がない。

3.7 「問7：参加したことで、日本の言語・文化についても詳しく勉強したいと思う。」

7割近い学生が評価5をつけているが、評価3以下の学生も9名いる。海外文化を体験することで、改めて日本文化を意識はしたが、自ら勉強したいという強い意志までは持てなかった学生もいたということであろうか。参加者全員が、日本を紹介する授業計画を日本で作成し、オーストラリアで実践してきている。日本のことを英語で紹介する楽しさ、難しさは強く感じていたようである。

《学生の声》

評価	学年	評価の理由
5	3年女子	外国に行くということは向こうの人に日本のことを教えることでもあり、今回の実習で自分の日本の文化に対する無知さを実感した。純粋に日本の文化にも興味を持つようになったし、オーストラリアの人たちが日本について興味を持ってくれればくれるほど、私も知りたいし教えたいと思うようになった。
4	3年男子	調べていく中で今までできなかった風呂敷の結び方ができるようになったり生徒からの質問に答えられなくて再び調べたりという過程を通して日本文化について学ぶことができた。
3	3年女子	生活していく中で、これは日本特有のものだな、海外に紹介したら面白いのかなと見る目が少し変わった。

3.8 「問8：参加したことで、グローバルな視点から、児童・生徒を指導することができると思う。」

グローバルな視点からという言葉に躊躇したようだが、評価3・4・5に分散している。短期間の一国での体験であり、グローバルな視点とまでは言い切れないと感じた学生も多かったようである。ただ、今回の体験を日本の子ども達に伝えていくことや、日本の子ども達が国語の授業で苦勞するように、オーストラリアの子達も英語学習に苦勞している姿を見ることができ、学生が教師となった時に会う子ども達に、オーストラリアの子ども達の様子を伝えていきたいと思う気持ちは強く持っているようである。

《学生の声》

評価	学年	評価の理由
5	3年女子	ネイティブだから全員ができるのかなと思っていたことも、 prep,year1 の子どもたちは1から学んでいて、それは日本人の子どもたちと一緒に学びました。オーストラリアの子どもたちが行っていた勉強方法を日本人の子どもたちに紹介してあげたらなと思いました。
4	4年女子	世界にも様々な人がいるという点から、英語を学習し世界で通用する人材を育成することの意義を少しでも理解できたから。
4	3年女子	生徒たちが新しい自分の知らない世界を知れば視野が広がるし、それぞれの文化を尊重したり共有したりする大切さを伝えたいという思いがあるから。

3.9 「問9：参加したことで、より一層、英語の学習をしたいと思う。」

ほとんどの学生が評価5をつけ、伝えたいことを伝えられない悔しさから、コミュニケーションツールとしての英語の学習を進めていきたいと望んでいる。また、日本でも外国の人とのコミュニケーションをはかりたいし、違う国にも行ってみたいと、さらなる学習場所を求めている学生も多くいる。実際、オーストラリアの教育実習参加後、留学相談に来て、短期長期の留学を行う学生が毎年数名ずつ存在する。

《学生の声》

評価	学年	評価の理由
5	3年女子	思いを伝えきれなかったり、子どもたちの英語をすべて聞き取ることができなかったのは心残り。スラングをもっと知りたいし、たくさんの人に会う中で自分の英語力をもっと伸ばしていきたいなと思った。
5	3年女子	知らない単語が多くスムーズに会話ができないときがあった。また、聞き取れなくてうまくコミュニケーションができないことがあった。日本の文化をもっと詳しく伝えたかった。と後悔する部分が多々あったので、もっと英語の学習をしたいと思った。
5	3年男子	今まで学習してきた英語で確かにコミュニケーションをとることはできたが、やはり伝えたい事を全て伝えられたわけではなかった。より口語的な表現なども学習し、一人で生活できるレベルまで英語の能力を高めたい。
5	3年男子	ただ語彙を目で見て覚えるだけでなく、自分から発話として運用する能力の養成が本当に大切だと感じた。
4	4年女子	うまく伝えられないなどの苦い経験が、一層英語を勉強したいという思いにつながったから。

3.10 「問10：教師になった時に、この海外教育実習のことを児童や生徒に体験を話したいと思う。」

問9と同様、ほとんどの学生が評価5をつけている。海外での体験が、学生自身にとって非常に有意義な経験だと思えるからこそ、教師となった時に会う児童や生徒に自分の体験を語り、世界に目を向けて欲しいと考えているのである。英語を話している国に行くというだけでなく、文化・風土の違いや、様々な人と関わり会話する喜びを知り、自分の世界観が広がった体験を皆に伝えたいという思いを持たせたことは、このプロジェクトの目指すところである。

《学生の声》

評価	学年	評価の理由
5	4年女子	日本の子どもたちにとっても、海外の小学校の様子を話すことは、視野を広げるためにととてもためになることだと思う。ぜひ来年度、自分が受け持つ子どもたちに、この体験を話したいと思う。
5	4年男子	子どもたちの英語を学びたいという意欲にもつながると思うし、国際理解教育の一環にもなると思うから。
5	4年男子	海外の子どもの様子を伝えることで、その子たちのやる気につながると思うから。
5	4年女子	たくさんの違いを肌で感じることができた。そのような文化の違いはきっと子どもたちの英語を学ぶモチベーションへとつながっていくだろう。
5	3年男子	僕が経験したこの素晴らしい実習や、オーストラリアの生徒の様子を伝えることで、生徒に海外や英語学習について興味をもってもらいたい。

4. 結語

今回改めて3年分のアンケートを集計してみて、学生達がいかに多くのことを学び、教員を目指している学生達にとって、オーストラリアでの教育実習体験が非常に有益であったことが明示された。また、実習体験後、報告会などで後輩に自分たちの体験を話したり、教員となって、児童生徒に自分の体験談を話したりして、さらなるグローバル人材育成に貢献していることも見えてきた。予算的には、年々厳しい状況になっているが、この良き連鎖に歯止めをかけぬよう、プロジェクトが続いていけることを切に願う。

最後になりましたが、学生達を支えてくれたオーストラリアの学校の先生方やホストファミリーの皆様には、多大なる感謝の意を述べたい。

参考文献

高橋美由紀・Anthony Ryan・稲垣真由美・加藤都佳沙. (2014). 「グローバル化に対応した教員養成～海外教育実習プログラム～」『愛知教育大学から発信するグローバル時代の英語教育』(pp. 137-154). 名古屋：鳴海出版.

資料 1 : 海外教育実習アンケート

専攻	学年	男・女	名前は任意()
実習した学校の種類は？	()		例：小学校、中学校
オーストラリアでの学年は？	()		例：Prep～Year 7
日本での該当学年は？	()		例：年長～中 1

I. オーストラリアでの教育実習について、番号とその理由を記入して下さい。

強く思う	思う	ふつう	思わない	強く思わない
5	4	3	2	1

①海外での教育実習に参加して良かったと思う。()

理由

()

②参加したことで、自身の英語コミュニケーション能力が向上したと思う。()

理由

()

③参加したことで、英語を人前で話すことに自信がついたと思う。()

理由

()

④参加したことで、英語で生徒や児童に指導することに自信がついたと思う。()

理由

()

⑤参加したことで、自身の授業実践指導力が向上したと思う。()

理由

()

⑥参加したことで、今後、日本の英語の授業に役立てることができると思う。()

理由

()

⑦参加したことで、日本の言語・文化についても詳しく勉強したいと思う。()

理由

()

⑧参加したことで、グローバルな視点から児童・生徒を指導することができると思う。

()

理由

()

⑨参加したことで、より一層、英語の学習をしたいと思う。()

理由

()

⑩教師になった時に、この海外教育実習のことを児童や生徒に体験を話したいと思う。

()

理由

()

II. オーストラリアでの教育実習について、良かった点について具体的に書いて下さい。

III. オーストラリアの教育実習について、反省等がありましたら具体的に書いて下さい。

IV. オーストラリアの教育実習について、課題を具体的に書いて下さい。

V. 今回の参加にあたり、運営面（渡航手続き、提出物、ミーティング等）でのご意見ご要望等あれば書いてください。

ありがとうございました。メールで英語サポートセンターまで提出して下さい。

aue.english@gmail.com

オーストラリアでの授業実践及び現地で感じた違いについて

愛知教育大学 教育学部 英語専攻 3年

有本 明日翔

1. はじめに

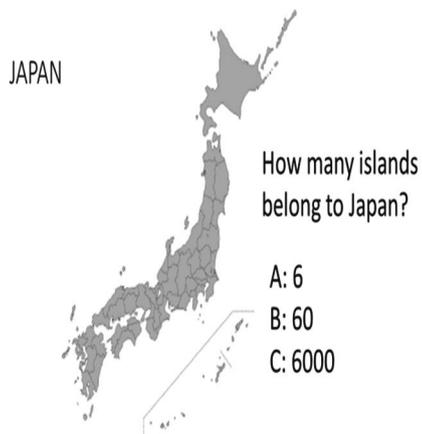
私は、オーストラリアバンダバーグに位置する St. Joseph's Catholic Primary School で3週間に渡り実習を行った。配属学級は Year 5 だったが、Year 5 を中心に他学級への訪問授業も含めると全10回に渡り授業をさせて頂くことができた。

実習が始まる前に日本において、What's Japan, What's Japanese food like, Setsubun の全3時限分(各60分)に相当する3の授業案を用意した。本報告書では、この3つの授業案のうち、広く日本について扱った What's Japan において一番好評だったため、実際に用いたパワーポイントをもとに現地で行った授業実践、さらには授業を通して感じたオーストラリアと日本の学校の差異について書いていく。

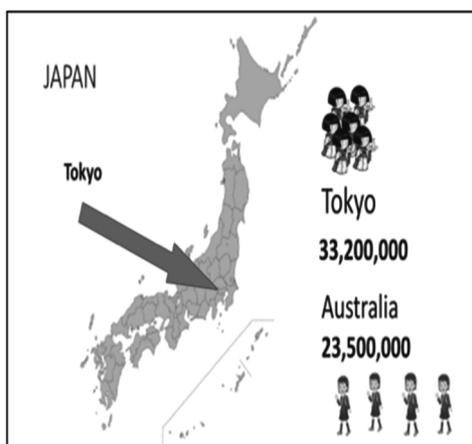
	<p>始めに驚いたのは、当校では授業の始まりの合図がないことだ。授業に入る前に以下の3点(①きりつ: Stand up ②きをつけ: Put your hands on your body.③れい: Bow down your head, saying "Onegai Shimasu)を板書し、数回練習するとすぐにできるようになった。“号令”は授業に入る雰囲気切り替えにとっても有効だったため、号令の大切さを感じた。</p>
	<p>本スライドは場面設定のために設けた。飛行機という子どもたちの視覚に訴えかける写真と「飛行機に乗って日本を探検しに行こう!」という声掛けに子どもたちの興味や関心をつかむことに成功したと思う。</p>



飛行機に乗れたところで目的地の場所が分からないといけない。ここでは、生徒に挙手をさせ指名された生徒が前に出て、自分が日本だと思う地図上の一点を指させた。高学年の子どもたちは、比較的日本の場所を知っていたが、**Prep** と呼ばれる日本の幼稚園学級で行った際には、彼らが日本以前にオーストラリアの場所すら分かっていないことは自分の盲点であった。

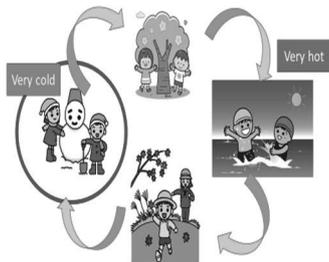


日本の島の数を問う発問だ。今回の実習に参加した学生が口をそろえて言うのは、「自分たち自身が日本について無知であることに気づかされた」ということだ。日本が 6000 島も所有しているということは、恥ずかしながら私自身が教材研究として日本を調べるまで知らなかった事実だ。



世界地図を見て明らかなように、日本はオーストラリアに比べれば小さな小さな島国だが、オーストラリアの全人口は日本の一部である東京に匹敵することを説明したスライドだ。著作権の都合上東京都内の通勤ラッシュ時間帯の電車内の写真は割愛させて頂いたが、子どもたちにとってその写真は相当な衝撃だったらしく、ただただ口を開けて愕然としていた。

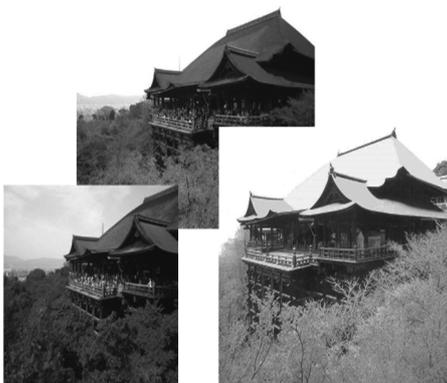
four seasons



ここまでは日本についての概要を説明してきたが、ここからは日本の四季について取り上げた。オーストラリアにも四季はあるが、日本ほど明らかな四季の変化は見られない。春夏秋冬それぞれに見られる四季の変化を写真と共に紹介した。

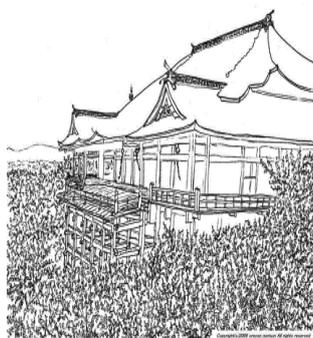
	Australia	Japan
Spring	September~ December	March~ June
Summer	December~ March	June~ September
Autumn	March~ June	September~ November
Winter	June~ September	November~ February

オーストラリアと日本の四季の時期が違うことが分かる簡単な表だ。実習に行った時期は、日本では夏にあたるが、オーストラリアでは冬であることを子どもたちに表を読み取らせ確認した。バンダバーグでは、朝夜は厚着をしないと寒かったが、子どもたちは日中は半袖で過ごしていた子が多かった。子どもたちは、紫外線が強いため、外に出るときは必ず指定の帽子をかぶるよう指導されていた。



ここでは割愛させて頂いたが、春の風物詩として桜、夏はキャラクター花火の動画、秋は紅葉、冬は冬景色を見せた。日本において英語の授業では、1つメイン活動を設けることが定石とされている。私は、今回の授業のメイン活動として色塗りを設定した。夏・秋・冬の清水寺をスライド上に提示し、春の清水寺を想像させ、色塗りをさせるというものだ。

Let's color the temple in spring!!! (15minutes)



時間を 15 分設定し、黙々と色塗り活動をさせた。時間になると、実に 1 人 1 人個性が表れた清水寺が完成した。前で作品を発表したい子どもを数名募り、作品を提示、さらに清水寺をその色で塗った理由を発表してもらった。先ほどのスライドで「春の風物詩は桜」と理解することができた大半の子どもは、「春は桜が見られるから」という理由で、桜色に装飾していたが、中には、自分の好きな色という理由で赤色に仕上げる子も見られた。

2. 授業を振り返って

今回の授業は、生徒参加型授業（アクティブラーニング）をテーマにして臨んだため、スライド上の文字は極力なくし、写真や動画などの視覚教材を多く使い、子どもたちの発言を促し、発言をもとに授業を展開した。本校では、子どもたちの発言がしやすい雰囲気づくりができていたため、とても授業を行いやすかった。授業をしていて驚いたことは、子どもたちは授業中においても何か疑問に思ったことがあると、手をあげる習慣が付いていた。子どもが挙手していることに気づいた教員は、その子を指名し、質問を受けるといったものだった。そのため、スライドを切り替えるたびに子どもたちの手が一斉に挙がり、本題の発問に入るまでに時間を要したが、教師の進めたいように行う授業ではなく、子どもたちの理解を重視した授業となっていたため自分が教員になった際にはぜひ取り入れたい。

オーストラリア海外教育実習 報告書

愛知教育大学 教育学部 英語専攻 3年

荒井 颯人

実習期間：2015/08/24～2015/09/04

配属学校：St.Patrick's Catholic Primary School

私は Year6（日本では 6 年生にあたる）に配属され 2 週間の実習を行った。28 人という比較的小規模のクラスであったが、現地校の教室は日本に比べて少し小さい程度だったため、教室のスペースにゆとりがあるわけではなかった。机列については、他の学年では担任の意向や授業スタイルによって個性があったが、Year6 になると児童が落ち着くからか日本とあまり変わらない配置になっていた。

<Year5 と Year6 の教室の様子>



Year5



Year6

Year6 の教室写真の通り、黒板ではなくホワイトボードと電子黒板が教室の前方に設置されており、ホワイトボードの大きさは日本の一般的な黒板の半分ほどであった。教師によると以前は全て黒板だったが、ICT の導入により現在の形を採用しているとのことだ。この学校では Year5 になると教材として iPad の自費購入をすることになっていて、児童は毎日各自の iPad を充電して学校に持ってくる。ICT 教育が盛んな学校であるため、授業で iPad を使わない日はなかったほどである。調べ学習でインターネットに接続するのはもちろんのこと、プレゼン資料の作成、学習アプリによる英語学習などにも活用されていた。また学校全域で Wi-Fi が完備されており、朝学校に来たらメールなどを通じて教師に宿題の提出をしている様子も見られた。この宿題も問題集が PDF 化されているものに直接テキ

ストを入力したりするものもあり、ペーパーでの提出はあまり見られなかった。

特に iPad の使用について日本と大きく違ったのが、教育サイトなどを利用した授業である。これは教師が予め作成したコンテンツに児童全員がアクセスをし、動画などを見たり設問に答えたりして学習していくもので、教師側の端末では児童の学習状況をリアルタイムで把握することができ、随時個別の指導を行っていた。児童は iPad を用いた授業に慣れている様子で、操作自体に手間取って授業が進まないといったことはほとんどなかったように感じる。



<iPad を用いた理科の授業の様子>

しかし授業を観察したり学級担任から話を聞いたりして問題点として浮かんだのが、「iPad 使用時に遊んでしまう」「全員が同時操作できるほどのインターネット回線が整っていない」「不測の事態に対応しにくい」といったことである。とある授業では準備に時間がかかったり動画の読み込みが遅かったりすることで、授業開始時刻が 15 分ほど遅れたこともあった。授業中に遊んでしまうことについても、教師が全員の行動を常に把握できているわけではないため、少数ではあるが別のことをしている児童もいた。

様々な問題はあるものの、ほとんどの授業が中途半端に終わってしまうことは少なかった。技術的問題が起きて授業が中断してしまっても、1つのクラスを終えるまでにどれほど時間を使っても授業内容が継続していたからだ。これはそもそも時間割が日本と違うためにできることであると考えられる。日本のように時限による明確な区切りで教科の勉強をしているというよりは、休み時間になるまでの授業時間内を教師が決めた区切りで様々な教科を学習していた。次のページにある teaching plan では、「10:00-10:10」「10:55-11:40」「13:40-14:00」が休み時間となっており、これは学校で決められたもので、休み時間に授業が延長することはなかった。それ以外の授業時間は教科と詳しい内容が書かれているが、たとえば 09:00-10:00 までの1時間の授業時間では、教師の裁量により英語と算数が30分ずつとなっている。しかし実際この日は英語の授業が長引いてしまい、1時間英語のみの授業であったため、算数の授業は次へと繰り越された。このプランの様に教師は前もってどの教科をどの程度教えるかの計画は立てているものの、やはり柔軟な対応で1日の計画を変更していくことが現地校では多かったと言える。これは学級担任によると、「教師が決めた枠組みで授業をすることが本来の教育ではなく、子どもが理解してこそその授業だ。子どもが納得のいくまで1つの授業をするから、これほど授業変更があるのだ。教師に大切なのは、柔軟性と対応力だと言える。」とのことであり、それを強く実感した実習であった。

資料 1 : 2015 年 9 月 2 日 1 日の授業プログラム

<u>Wednesday 2nd September 2015.</u>									
9.00-9.20	Courtyard prayer – (朝のお祈り) Morning session (朝の会)								
9.00-9.30	English - Reading Groups: (英語 ; リーディング、スペリング) <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 30%;">Barbie Bogans</td> <td>Hands on – iPads – playing an educational App called Skoolbo. (in the corridor) collections #7 – tv friend or foe?</td> </tr> <tr> <td>Rainbow Meerkats</td> <td>iPads – Spelling skills – children use their iPads to write their spelling list words using Minecraft or PicCollage Apps). (done at their desks) – in their dashboard – in English folder – task page. Collections #9 – Bella Beach Belle</td> </tr> <tr> <td>Killer Brotatoes from Barbieland</td> <td>Reading with me - (around the back desk) - direct each member to bring with them a pencil and their English pads – title and date new page – Predict – looking at the title and picture only what do you think this story is about? <ol style="list-style-type: none"> 1. Share predictions – explain why? 2. direct children to read to themselves their book – in turn direct each singular student to read out aloud for me – check for fluency, understanding, etc. </td> </tr> <tr> <td>Starbucks</td> <td>Comprehension – The language of ships#2.</td> </tr> </table>	Barbie Bogans	Hands on – iPads – playing an educational App called Skoolbo. (in the corridor) collections #7 – tv friend or foe?	Rainbow Meerkats	iPads – Spelling skills – children use their iPads to write their spelling list words using Minecraft or PicCollage Apps). (done at their desks) – in their dashboard – in English folder – task page. Collections #9 – Bella Beach Belle	Killer Brotatoes from Barbieland	Reading with me - (around the back desk) - direct each member to bring with them a pencil and their English pads – title and date new page – Predict – looking at the title and picture only what do you think this story is about? <ol style="list-style-type: none"> 1. Share predictions – explain why? 2. direct children to read to themselves their book – in turn direct each singular student to read out aloud for me – check for fluency, understanding, etc. 	Starbucks	Comprehension – The language of ships#2.
Barbie Bogans	Hands on – iPads – playing an educational App called Skoolbo. (in the corridor) collections #7 – tv friend or foe?								
Rainbow Meerkats	iPads – Spelling skills – children use their iPads to write their spelling list words using Minecraft or PicCollage Apps). (done at their desks) – in their dashboard – in English folder – task page. Collections #9 – Bella Beach Belle								
Killer Brotatoes from Barbieland	Reading with me - (around the back desk) - direct each member to bring with them a pencil and their English pads – title and date new page – Predict – looking at the title and picture only what do you think this story is about? <ol style="list-style-type: none"> 1. Share predictions – explain why? 2. direct children to read to themselves their book – in turn direct each singular student to read out aloud for me – check for fluency, understanding, etc. 								
Starbucks	Comprehension – The language of ships#2.								
9.30-10.00	Maths – Number (算数) (See if Jordan would like to teach 1st basic Karta whilst we all say the numbers) – use the MPC for this exercise.								
10.00-10.10	Snack Attack (軽食 ; 休み時間)								

10.10-10.55	<p>Maths – Maths – number facts activity (算数 ; 計算)</p> <p>Direct children to go to their iPads – go to google chrome – type: www.topmarks.co.uk/maths-games/hit-the-button</p> <p>children play activity.</p> <p>※計算学習のサイトを利用</p> <p>Maths – Khan academy – direct children to start at year 3 mats – go through completing as many levels as you can – 20 mins max.</p>
10.55-11.40	<p><u>Main lunch</u> – (昼食 ; 昼休み)</p>
11.40-12.00	<p>Class novel. (読書)</p>
12.00-12.40	<p>English – Word scrambles and shapes week 6. (英語 ; 単語小テスト)</p>
12.40-1.00	<p>English – newspaper articles – look back at the Nepal quake story – direct children to: (英語)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. Read the article. 2. What is the main idea of this text? 3. What 4 details are there in this article? <p>Children work in groups of 4 to complete these questions.</p> <p>English – changing meanings with prefixes –</p> <p>Ask: What is a prefix?</p> <p>Direct children to get out their English pads and margin and date their page.</p> <p>Heading – Changing meanings with prefixes.</p> <p>Children write the following down in dot points on their page:</p> <ul style="list-style-type: none"> • A prefix is a word part added to the beginning of a word to change its meaning. • The word prefix itself is made of a Latin word meaning “to fasten” and prefix pre – meaning “before”. • Learning the meanings of common prefixes is important. This information will often help you work out the meaning of a new word. • For example, if you know the prefix mis = means “bad” or “wrong” you would have no trouble understanding misbehave or misspell. • Re = again, or once more – reappear, recapture, redo • Pre = before – prepaid.

	<p>Take a photo of your work.</p> <p>Now open either PAGES or EXPLAIN EVERYTHING and share this info into the app.</p> <p>Now go to your dashboard – English folder – open the file called Prefixes – share this into the aforementioned app.</p> <p>Complete the work page.</p> <p>P57 Communicate and comprehend.</p>
1.00-1.40	<p>Religion – Father’s Day Liturgy practice – with Mrs Cook. (宗教)</p> <p>※キリスト教系の学校なので、それに関する学習をする。</p>
1.40-2.00	<p>2nd lunch (軽食 ; 休み時間)</p>
2.00-2.55	<p>Library – borrowing and then BTN. (図書館で本を借り、BTN を視聴)</p> <p>※BTN : Behind the News のこと。図書館にニュース映像があり、それを子ども全員で視聴する。</p>

オーストラリア海外教育実習 報告書

愛知教育大学 中等英語 3年 加藤 佑美

配属先：St.Patricks Catholic Primary School

1. 教室の様子

第1学年



第3学年



机の位置はクラスや授業によって違いがあり、日本の学校のように固定されていない。担当の教師や学年によって教室の様子はかなり異なる。教室には電子黒板と iPad が常備されていて、それらを用いて授業する時もある。ホワイトボードや黒板を使うこともある。

第1学年の教室には絵本やブロックなどの玩具が置かれていた。床は木ではなく、柔らかい素材で覆われていて、床に座って朝の会を行ったり、読み聞かせをすることもあった。

2. 授業時間

授業の様子。低学年では床に座って授業を受けることも多い。



日本のようにはっきりとした時間割があるわけではなく、漠然としたタイムスケジュールがある程度である。授業終わりには必ずお祈りをする時間がある。昼食やアフタヌーンティーの時間は長い、その代わりに10分や15分の小休憩がない。

常にどの先生も電子黒板を使っているわけではなく、何を媒体に授業するかは教師と科目によって様々である。iPadを用いた自学自習や調べ学習を第1学年から行っており、ICT教育の普及率は日本より圧倒的に高いことがよく分かった。同じ科目でも生徒によって目標や内容の難易度が違って、画一的な授業になっていなかった。また、日本でいう国語のような授業の際は、教室から出て外で読書をしていても良いなど、机の上や教室内に留まらない柔軟性が見られた。

第1学年は保護者がボランティアとして授業の手伝いに来ていることが多く、理解に時間のかかる子の取り出し指導を保護者が行っている様子をよく見かけた。保護者のボランティアでは、今日は誰が担当するのかが予め決められていた。

3. 授業外活動・特別活動など

昼食は教室内ではなく、外で他学年と一緒に食べる。給食ではなくお弁当や校内の購買で購入したものを食べる。アフタヌーンティーの時間がある。

毎朝全学年が集まってお祈りをする。また、それとは別に定期的に Assembly という特別な集会があり、担当学年が学習成果を発表したり、劇を行ったりする。学校行事が日本の学校よりも多いように感じられた。終業時刻は15時頃で日本よりも早く、家庭での家族の時間を大切にしている国民性が現れていた。

実習中に感じた日本とオーストラリアの教育事情の違い

愛知教育大学 現代学芸課程 矢田部 希

配属先：St. Joseph's Catholic Primary School, Bundaberg

《実習中に気がついたこと》

- ・ 授業が 90 分である
- ・ 学校への送迎が当たり前である
- ・ ランチは、全員が外で食べる
- ・ 電子黒板を使って行う授業がある
- ・ ほぼ毎日、ipad やパソコンを使用して行う授業がある
- ・ “Book Day” という日があり、その日は仮装して学校へ来る
- ・ ディスコに参加する時間があった
- ・ 読書の時間が多く設けられている
- ・ 机の配置は、日本のように黒板に向かうスタイル だけでなく、横に 5 列並んでいたり、四角く囲んであったり、様々であった
- ・ 日本のようにドリルをするのではなく、プリントをして、終わったら読書をしていた
- ・ 朝の連絡は、床に座って行うことが多かった
- ・ 授業の中で、学習内容を使ったゲームを取り入れていることが多かった
- ・ 制服着用で、体育のときも体操服に着替えることがなかった
- ・ 教室に入るときは、外で整列してから入っていた
- ・ 掃除の時間がなかった
- ・ 担任の先生が 2、3 週間ごとに一回変わった



グローバル人材プロジェクト活動報告
グローバル英語教育研究開発室の取り組み

山田 美樹・稲垣 真由美・長峯 貴幸
(愛知教育大学)

概要

愛知教育大学では 2014 年度よりグローバル人材の育成を目的とし、「グローバル英語教育研究開発室」を拠点として研究を行っている。ここではプロジェクトで取り組んできた 2 年間の活動内容を報告する。主な活動は、1)英語サポートセンターの運営、2)海外派遣と国際交流プログラム支援の 2 点である。

キーワード 英語サポートセンター 海外教育実習 海外交流プログラム

1. 英語サポートセンターの運営

英語学習支援として、第一人文棟 6 階にて「英語サポートセンター」を開設し英語に関する様々な相談に応じている。その相談内容は、TOEIC 対策、英検対策、英会話、留学相談、授業の予習復習などである。初回来室時に、カウンセリングを行い現在の状況やどのようなサポートを希望しているかを把握し、定期的に通い学習するパターンや、適宜問題集を借りて自宅での学習を進めるパターンなど個々に合わせて支援方法を決定する。支援が決まると、主に英語科の院生、学部生で構成される学生チューターが個別にサポートにあたる。(図 1)

図 1 チューターによる学習支援の様子



本学では 1 年時の 7 月と 2 年時の 12 月に TOEIC IP テストの受験を義務付けており 350 点以下の場合補習となるシステムを設けている。そのため例年 TOEIC のスコアアップを目指し多くの学生が来室する。TOEIC 対策の問題集も多く揃え、自宅で学習もできるよう問

題集の貸出も行っている。

2. 海外派遣と国際交流プログラム支援

2.1 オーストラリア教育実習

本プロジェクトでは、本学外国語教育講座のライアン准教授が中心となり、2012年度より、例年夏にオーストラリアにて海外教育実習を実施している。英語サポートセンターでは、渡航に伴う諸手続きと派遣学生の支援に当たっている。毎年20名前後の学生をオーストラリアに派遣し、現地校にて授業実践を行っている。期間は2週間から3週間で、各学校に1、2が配属され授業やサポートを行う。実習中は学校の保護者や教員の家にホームステイをするためオーストラリアでの生活も体験することができる。

このプログラムの価値は、他国の教育事情を知ることによって視野が広がり、日本の教育の良さや課題を考える機会を得られることであり、これらは日本の教育実習に参加するだけでは学べないことである。このプログラムに参加する学生は、将来英語教員になる学生が多いため、この経験が将来日本の子どもたちへの教育に生かされることが期待される。

図2 全校集会の様子



図3 授業の様子①



図4 授業の様子②



図5 ホストファミリーと



2.2 ニューマン交流プログラム

2015年度から新たに始まったこのプログラムでは、主に本学外国語教育講座のロビンズ教授が中心となってイギリスにある本学の提携校であるニューマン大学から学生を招き、本学の学生と交流を行った。英語サポートセンターでは、日頃英語を学習している学生との交流を目的として「英語サポートセンター主催交流会」を実施した。イベントの内容は、一緒に調理、会食をしながら英語で交流を行うというもので、巻きずし、どら焼き、かき氷などを作った。多くの学生、教員が参加し異文化体験を通して交流するよい機会となった。

図6 調理の様子



図7 日本文化体験



図8 交流会の様子



図9 京都旅行



3. 今後の課題と展望

「グローバル教育研究開発室」としての取り組みは2014、2015年の2年で終了するが、ここまで述べた全ての取り組みは軌道に乗り始めたところであり、利用者や参加者からは存続を希望する声が多い。今後は存続させるための十分や予算と人員の確保が重要となってくる。

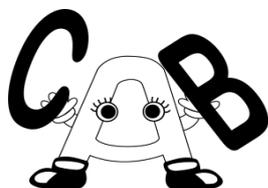
特に英語サポートセンターについては、大学全体の英語力の底上げに全力を尽くしてい

るが、支援が必要だと思われる学生が増えているのが現状である。一方で英語力を伸ばしたい、英語が話せるようになりたいという意欲のある学生も多く、それぞれが目的を達成できるよう試行錯誤しながら新たな取り組みを考えていきたい。

参考文献

- 小川知恵・稲垣真由美. (2011). 「小中英語支援室における英語教育のサポート事業について」『これからの小中英語教育を創る』(pp. 180-185). 名古屋：中部日本教育文化会.
- 小塚良孝・田口達也・稲垣真由美・加藤都佳沙. (2014). 「サポートセンターの取り組み」『英語学習自律の向上と学習文化の構築を目指して』(pp. 39-55). 名古屋：鳴海出版

英語サポートセンター



英語サポートセンターでは、英語全般について、チューターからアドバイスを受けたり、相談したりすることができます。「TOEICが不安・・・」「小学校で英語の授業?!」「留学したいけど・・・」などなど、一人で悩んでないで、サポートセンターのドアをたたいてみてください!

★TOEIC・英検などの資格取得対策

- ・TOEICなどの試験に向けて、チューターさんが優しく学習支援をしてくれるよ

★英語に関する相談

- ・英語授業でのお悩み相談
- ・留学についての相談や、留学を経験したチューターに話を聞くことができるよ
- ・英語赤ペン先生（チューター）に手紙で相談もできるよ



★TOEICや英検対策問題集・参考図書・授業DVDの貸出

- ・試験問題集や中学校教科書、英語教育に関する本などいろいろあるよ
- ・実際の教育現場での授業をDVDと指導案でみることができるよ

場所 第一人文棟6階 608号室(エレベーター左)

時間 火～金 10:30～16:00【予約不要】
(木曜日のみ15:00まで)

対象 愛知教育大学の学生ならどなたでも



【問い合わせ】 英語サポートセンター aue.english@gmail.com

英語専攻教員 田口達也・小塚良孝

英語サポートセンターHP <http://www.aue-english.aichi-edu.ac.jp/index.html>

詳しくは、英語サポートセンターHPをみてね★

TOEICテスト情報もあるよ!!!



英語サポートセンターHP

執筆者一覧

共同執筆者(五十音順)

荒井 颯人	愛知教育大学	中等教育教員養成課程	英語専攻
有本 明日翔	愛知教育大学	中等教育教員養成課程	英語専攻
Anthony Robins	愛知教育大学	教授	
Anthony Ryan	愛知教育大学	准教授	
稲垣 真由美	愛知教育大学	研究補佐員	
加藤 佑美	愛知教育大学	中等教育教員養成課程	英語専攻
高橋 美由紀	愛知教育大学	教授	
長峯 貴幸	愛知教育大学	研究補佐員	
矢田部 希	愛知教育大学	現代学芸課程	国際文化コース
山田 美樹	愛知教育大学	研究補佐員	

グローバル化へのアプローチ 海外教育実習と国際交流事業を通して

発行日 2016年3月31日
著者 愛知教育大学外国語教育講座
〒448-8542 愛知県刈谷市井ヶ谷町広沢1
TEL 0566-26-2111
発行所 鳴海出版
〒458-0801 名古屋市緑区鳴海町柳長13
TEL 052-621-2716

愛知教育大学

Aichi University of Education